師範學校

國文教科書

本科用

修正十八版

卷六

375.9
Y619
資料室

42579
教科書文庫
4
810
51-1919
20003
02264

資料室
395.9
Y019

文部省檢定濟
大正八年一月十日　師範學校國語科教科書

吉田彌平編

本科用

師範學校國文教科書

東京　光風館藏版

卷六

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 35766 図書

師範學校 **國文教科書** 本科用卷六

目次

一 文學と人生……藤井健治郎 一頁
二 柳綠花紅（新體詩）……藤岡作太郎 一五
三 鎌倉室町時代の文學……三
四 待賢門の戰……〔平治物語〕 三
五 大原御幸……〔平治物語〕 四
六 霞の洞……〔增鏡〕 五
七 芋を贈られしに（候文）……日蓮 丑六

八 況後錄……高山樗牛 五八
九 羽衣……〔謠曲〕 六二
一〇 比良の山風(短歌)…… 七〇
一一 秋の力……綱島梁川 七三
一二 江戸時代の文學……藤岡作太郎 七六
一三 月は世々の形見……室鳩巢 八七
一四 西行法師……上田秋成 九三
一五 鼠……井原西鶴
一六 百蟲譜……横井也有 一〇八
一七 明治時代の文學……佐々政一 一二三
一八 人生の快事その一……三宅雪嶺 一三九

一九 人生の快事その二……三宅雪嶺 一三九
二〇 大丈夫の覺悟……幸田露伴 一三七

附錄

第六篇 國語問題
一 發音に關する問題……一
二 文字に關する問題……三
三 文法に關する問題……六
四 單語に關する問題……七
五 文章に關する問題……八

廣島大學圖書之印

師範學校 **國文教科書** 本科用 卷六

藤井健治郎
倫理學者。文學博士。京都帝國大學文科大學教授。明治四年生。

一 文學と人生

藤井健治郎

諸君、文學とは何であるか。文學は人生の縮圖である。海の様に廣い人生と云ふ中に現れた百般の姿相を盥の如き狹い表面の上へさながらに描寫したものが文學である。さらば人生とは何であるか。よく世間では、「吉凶禍福は糾へる縄の如し」と言ふが、人の運命は啻に糾へる縄の如きのみではない。彼の大空に横たはれる雲のやうに、あるかと

見れば消え、消えたかと見れば涌き、海かと見れば山、龍かと見れば虎、乍ちにして淡く、乍ちにして濃く、變幻出沒殆ど端倪すべからざるものである。たゞ此の一片の雲でさへ少からず吾等の感興を惹くものを、それよりも更に奇妙で、更に變化ある此の人生の波瀾・動搖が、どうして吾等の感興を惹起さずにあらう。變幻出沒極りないのが人生の姿相である。これが人生であるかと見れば忽ち其の姿をかへ、それが眞相かと見れば又忽ち消えて跡を晦ます。凡手は容易にこれを捉へることが出來ず、凡眼はなか〳〵其の眞相を認めることが出來ない。しかも捉へることがむづかしければむづかしいほど、認めにくければ認めにくいほど、之を捉へたい、認めたいと思ふのは、誰しもの人情である。然るに詩人といふものは其の鋭敏な眼と靈妙な腕とを以てその認め難い人生の眞相をしつかりと捉へて來て、それを世人の前に示すのである。是が文學である。そこで世人は堪らない。自分の熱望の目的物が眼前に現れるから、人の視線は之に吸ひつけられ、觀ても觀飽く事を知らないのである。

私は文學は人生の縮圖であると云ふ。その大體の意味は前に言つた通であるが、猶爰に一つの疑が殘つて居る。それは外でもない。その縮圖とはどういふ意味であるかといふことである。雅邦の描いた瀟湘の八景は彼の洞庭湖

雅邦
橋本雅邦。畫家。東京美術學校教授。明治四十一年歿す年七十四。

瀟湘八景
平沙落雁。遠浦歸帆。山市晴嵐。江天暮雪。洞庭秋月。瀟湘夜雨。煙寺晚鐘。漁村夕照。

邊の大觀の縮圖である。又長沙あたりで賣つて居る寫眞もやはり同じ縮圖である。寧ろ寫眞の方は實際の通、一木一石少しも實際のものと違はず寫されて居るが、雅邦の描いたものはさうでない。精密に見れば、實際に生えて居ない木が生えて居たり、實際にある巖が省かれて居たりするであらう。併しながら兩者共に彼の美はしい壯觀の縮圖たるに於ては同一である。文學は人生の縮圖であると云ふ。縮圖は彼の繪畫的縮圖の意か、寫眞的縮圖の意か。是が殘つて居る問題である。

此の問題は一刀兩斷に答へる事が出來る。凡そ文學とあらん程のものは必ず繪畫的の縮圖であり、又あるべきもの

たる事は疑ないと思ふ。成る程唯縮圖といふ點より見たならば、寫眞の方が遙に精密な縮圖であらう。併し今少し他の點から考へれば、さうではないのである。凡そ物には要といふべき點がある。其の要を捉へさへすれば、其の他は之をあぐる必要もなく、否むしろ擧げない方がよいのである。實際の物には穢い所もあり、醜い所もある、また不完全な處もある。必要の點以上に此等のものをも殘らず擧げるときには、却て吾等の感興を害ひ吾等の想像を破つて、彼の湖邊の美を發揮しようとした折角の努力も失敗に了るのである。されば唯湖邊の美觀の肝要な場所をば極めて精采あるやうに描いて、其の他はすべて觀者の想像に任

せる方が、その美觀を眞に發揮する所以である。故に美を發揮する方からいへば、繪畫的縮圖こそ眞正の縮圖であると信ずる。そこで此の人生百般の姿相を捉へて吾等が美的感興の對象となし、美的趣味を滿足せしめようと云ふ文學は必ず繪畫的縮圖たり又たるべき事は殆ど絮說するの必要もないと信ぜられる。

諸君、文學とは何であるか。文學は人生の救である。

凡そ吾等に苦み惱みのあるのは「我」といふものがあるからである。「我」あるが故に空しき望を起し、限なき欲を逞しうせんとするのである。「我」あるが故に限なき名聞の奴となり、限なき黃金の僕となるのである。「我」あればこそ憎惡もあり、怨恨もあるのである。名聞の奴となり、黃金の僕となり、憎惡怨恨の焰に燃さるればこそ此の世に苦みといふものはあるのである。されればこそ菩提樹下に大悟徹底せられた大聖も「我」を以て一切苦の根本となされたのである。

若し吾等にして我執を離れ、妄見を脫するを得たならば、吾等の意は如何に安らかに、吾等の情は如何に爽かであらう。而して吾等をして此の我執を離れ、妄見を脫せしむる所の易行道は何であるか。そは文學に外ならぬのである。吾等が美はしい詩や歌を吟詠し、戲曲・小說を玩味する時には、全く一種の別天地に移つて、一切の我執・妄見は玆に全く消滅し、讀みゆく己、讀まるゝ文學、一つに融けて差別もなくな

り、唯何とはなしに怡悅滿足の思をするものである。しかもこれは啻に一時の救のみでなく、永く我等が生涯に影響を及すものである。もとより獨り文學と謂はず、其の他の藝術も、皆吾等を靈化する力を以て居るには相違ない。併しながら音樂なり、繪畫なりは、割合に專門的・技術的要素が多く、何人でも其の力に縋つて救濟を得るといふわけにはいかない。然るに文學にはその要素が少い。其の文字と文章とを解し得る人ならば、誰でも多少の救を受けることが出來る。是私が文學は解脫の易行道であるといふ所以である。

凡そ吾等人間を救濟するものが三つある。第一は只今述

分け登る麓の道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな。

べた所の文學の力で、第二は道德の力、第三は宗教の力である。文學は感情によつて直觀的に救濟の任務を果さうとし、道德は意志によつて漸進的に救濟しようとし、宗教は其の中間に立つて、半面は情により半面は意志によつて救濟せんとするものである。此の三者は此の如く分け登る麓の路に於てこそ違へ、つまりは同じ高嶺の月を見んとするものである。かやうに考へればその何れの道によつて救濟を求むるも其の人々の自由であつて、必ずしも己に同じき者に黨して異なる者を伐つの必要がないことは明かである。然るに世人は此の事を忘れて、所謂文藝派の人々と所謂道學派の人々と相鬩ぐが如き愚を演じて居る。

併し斯く言へば、或は「唯文學のみにより、もしくは道德のみによりて、果して全き人格の救濟が得られようか」と問ふ者があるであらう。私は必ず之を可能であると信ずる。眞に美なるものは又必ず善を兼ね、眞に善なるものは又必ず美を含んで居るものである。卽ちカロースは必ずアガトンを兼ね、アガトンは必ずカロースを含んで居るものである。善を兼ねざる美なく、美を含まざる善はない。これは必ずしもヘラス民族の經驗ばかりではない、又吾等の親しく經驗するところであると思ふ。されば眞に美なる文學によつて救濟せられるものは人格全體の救濟であり、眞に善なる法則によつて救濟せられるものは矢張人格全體の

一絕
乾坤無地卓孤節、喜得人空法亦空。珍重大元三尺劒、電光影裏斬春風。

救濟であると思ふ。

諸君、文學とは何であるか。文學は人生の力である。

將に寃罪の刄の下に無慚の最期を遂げなんとせる禪僧祖元が纔に生命を全うするを得たのは果して何の力によるか。彼が死に臨んで泰然として吟詠した一絕の力ではないか。幾多愛國の志士をして感奮興起せしめた東湖の正氣歌は今日猶凜として生氣あり、眞に懦夫をして起たしめるの概があるではないか。徒に理想とやらにあこがれて、老いたる父母にさん〳〵歎を見せ、後でやつぱり其の父母が慕はしくなつて現實界に還つて來た新曲浦島の太郎は幾多熱血の涌きかへる青年に向つて、理想は現實を離るべ

からず、唯此の現實界をさながらに淨土と觀じ、極樂と化すべきものであるといふ信念を鼓吹したのではなからうか。涙に沈める婦女、貧に苦しめる青年をして、再び生氣を呼起し蘇生せしめるものはすべてこれ文學ではないか。文學は人生の力である。此の力を得て此の力を利用せんとし、此の力によつて其の天福に與らんとする努力は、凡そ人間の努力中にあつて、最も神聖な、最も高い努力の一つである。宗教家が其の力を利用して自己の信ずる所の福音を傳へ、政治家が其の力を利用して經世濟民の具とした事、古今東西其の例に乏しくないのである。

實に、文學は人生救濟の具として道德・宗教と並び立つ者である。從つて彼等の間には互に相聯絡交通する所がある。而して文學の力の、最も直接に其の影響を及す方面は道德の方面である。いま文學創作者の立場からでなく、社會現象の一つとして文學を見るときには、其の影響は直接又は間接に、益〻道德を助け、道德を高尚にするか、若しくはその反對に直接又は間接に道德を破り、之を墮落せしむるかといふ問題に歸着する。

かやうにいろ〳〵の影響があるから、見る人によつて文學の批評もちがふ。老人は「近頃の小說は實に風敎を害するの甚だしいものである。あれは絕對に禁止せねばならぬ。」といひ、青年輩は「美は美である。風敎と藝術とは世界がち

がふ」といつて、現代の作物を歡迎する。いかにも青年の云ふ樣に、美は美の繩張があるから、一概に風教云々を以てこれを律することは出來ぬ。さればと云つて、現代の作品をのみ追つて居て、更に高尚な作物のあるのを遺れて居るが如きはこれ亦贊成することが出來ぬ。文學と風教との關係問題は、理想境に達しない現實の人生に於ては、つまる所一時の社會政策上の問題である。現今の道德に悖戻するが如き文學は、之を禁止するのは政策上已むを得ないことであらう。併し又一般讀者の趣味が漸々微妙に、漸々高尚になるならば、文學上の作品も漸次理想に近づくことであらう。到底理想は善美一致の境にあるのである。（時代思潮）

藤岡作太郎
國文學者。文學博士。東京帝國大學文科大學助教授、明治四十三年歿す年四十一。

二　柳綠花紅

藤岡作太郎

遊子學んで二十餘年、たゞ惑に溺れ、
既に現在に飽いてまた當來を懼れ、
疑惧煩悶、衣食も安からず、
ひとり一个の笠に苦みの頭を包みて、
千年年毎に新なる舊都の春にさまよへば、
柳綠花紅更にわが胸を痛ましむるかな。

比叡の麓にわたれる霞は、近く春風に匂ひ、
愛宕の嶺を越せる雲雀は、俄に脚下に墜つ。

指さす方に繪と見ゆる祇園・清水・三の峯、
塔影小さきところ、色ほのかなる男山。
麥隴菜畝歷史の印を殘さゞるはなく、
無常迅速いづれも涙の跡なるよ。

法成寺 藤原道長の建てたる寺。
隱僧 象好法師。

安養淨土の法成寺もあはれこの淺茅原と、
雙が岡の隱僧が昔語りも夢なりや。
木幡の外山松柏空しく薪と摧かれぬ。
二十年の榮華は沙羅雙樹の花の色、
六波羅殿はたゞ洛東に名を留むれども、
慘憺たる經營蜻蛉の命と共に何か殘れる。

金城鐵壁の迹、桃の花うつろひて、
春草萌ゆる處たま〳〵瓦片ぞ散りぼひたる。
伏見・桃山幽鳥の囀るに任せて、
四海併呑の雄圖も淀の水泡と消えたりや。
あゝ英雄の事業、大は即ち大なれど、
「時」の前にはたゞ風前の燈火。

悲しきかな、生滅の鬼は日に〳〵人を餌として、
惠も罪も愛も望も旭の霜と解け去りぬ。
英傑の遺業消ゆるは卒都婆の文字より早ければ、

爲すなき一生、あなはかなしや。
秋風吹けば、梢の木の葉ちり〳〵に、
互に急ぎ相逐ひて、もとの土にぞ歸るなる。

消ゆる待つ間の露とこの身を思へば、
恐は刻々にわが肉を削り去り、
すわる茵はうき雲の絶えずぞ搖るゝ。
いづこか驕傲なる「時」のかひなさを嗤ひ、
永劫の片はしをわが隱れ家として、
不變の呼に慰樂の聲を求むべき。

宇治の浮舟流るゝ跡の消ゆる如、
はかなく過ぎし五十餘帖の物語、
やさしき筆をたどりにし主は淑女の名のみして、
若紫の色はあせ、匂は殘る九百年。
繙く人はあやしく墨の香に醉ひて、
わが身をもうき世の事をも忘るなる。

わが世を捨てゝ文學の野に分け入れば、
樹々も千草も花咲亂れ、實なりこぼれ、
くしき女神の眞玉なす手に招くなる。
時もや過ぐる、世もや歷る、常なき事の忘らるゝ。

蓬萊瀛洲もたゞ詩人の想より。
人こそ朽つれ、筆の命毛永くこそ。

補陀落や岸うつ波とくりかへす
東寺の禮讃、振鈴聲すみてそゞろ涙ぞ進むなる。
幾千人か祈るなる遍照金剛の聲々の
一息づゝに大師の御姿現はるゝ。
この世の限なり出でん人の心に刻まるゝ
尊き碑、時の嵐もいかにせん。
英傑は我のみ立てゝ世人を土埃と散らし、

補陀落や
補陀落や岸打つ波は三熊野の那智の御山にひゞく瀧津瀨。

大聖は我を空しうして世人の爲に棄つ。
英傑死すれば世人は背き去つて顧みず、
大聖世を去れども世人は幾度もまた大聖たり。
生、死流轉はわが前に雲煙よりも淡く、
眞如實相の月ぞ常しへに明かなる。

宗教は秋山の下氷壯夫、文學は春山の霞壯夫。
これは櫻花の散りては年々に色鮮かに、
かれは常磐の松の千歳も數ならず。
濁れるを清くし、疑へるを信ぜしめ、
うたかたの世より無限の仙境に誘ふ、

あはれはらからこの同胞(はらから)よ。（東圃遺稿）

三　鎌倉室町時代の文學

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに一變す。公卿は政權を失ふと共に意氣沮喪し、武人は兵事に勵めども、文事に疎く、庶民は數度の戰亂に疲勞し困憊して、生活に餘裕なし。從つて當代の文學に雄篇・傑作の多からざりしは亦已むを得ざる所なり。

當時、專ら武家の祐筆となり參謀となりて文筆に從事した る者は僧侶にして、純文學の如きも多くは其の手に成れり。されば、此の時代の文學に佛教的傾向の存すること、平安朝よりも甚だしく、到る、ところに無常輪廻の思想を見るは、一は僧侶の手に成れるがため、一は時勢の然らしめし所にして、實に當時の頻繁なる變亂は、社會をして自ら厭世に傾かしめ、盛者必衰會者定離の觀念の、深く人心の根柢に染みたること、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。

漢學は平安朝の半ば頃より漸く衰へ、上流の人は尚これを第一の學問となせども、多くは純粹なる漢文を書き得ず、こに和漢混交の一種特別なる文體を生ぜり。この文體を以て記したるものにて、最初に成功したるは蓋し方丈記なるべし。方丈記は、鴨長明が、源平の紛擾たえまなき世を厭ひて、山城の日野に隱棲せることを記せる短篇にして、文辭

の流暢なるを以て顯はる。

更に、和漢混交體の大いに光彩を放ちたるは、源平爭鬪の次第顚末を記したる軍記類なり。抑、源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞するものをして、自ら一種悲壯の感に打たれざるを得ざらしむ。こゝに於てか軍記の作あり。その最初に出でたるものは保元・平治の兩物語にして共に簡勁を以て勝れたり。ついで出でたる平家物語は、蓋し曲節を附して諷誦せんが爲に作られしものなるべく、縱に雄大悲壯なる戰記を以て貫き、横に哀憐優雅なる物語を錯綜して、其の間にまた幽玄奧妙の佛敎趣味を點綴す。されば治承の春を名殘に、壽永の秋を西國さして落ちゆける、夢より

も果敢なき平家一門が榮枯盛衰の記述には、言々涙あり、句句同情あり、讀む人をして、讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて、佛道に歸入せしめずんばやまざらんとす。その冒頭を、「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必滅の理を現はす。」といふに起して、最後の卷には、建禮門院が後白河法皇への物語に、其の經過せる一生を六道に譬へたまへりといふに考へても、以て其の全豹を推すに足るべし。

源平盛衰記は平家物語に比してその記事更に詳密なり。文章頗る華麗にして漢語を交ふること平家より遙に多し。太平記は平家物語に倣ひて作れるものにして、後醍醐天皇

の即位に筆を起し、爾後五十年間の戰亂の始末を記述す。中興の事業に多大の同情と尊敬とを捧げて起ち、數多の忠孝節義の士が事蹟を點綴して、其の間に倫理的・宗教的觀念を鼓吹せるを見る。文體は漢語を用ふること更に著しく、文脈はた漢文調を加へたり。

是等のものと稍其の趣を異にし、率直平易なる文體にて書ける散文に、十訓抄・古今著聞集・宇治拾遺物語あり。いづれも平安朝の今昔物語等に倣ひて、古來の面白く珍らしき事實を輯めたるものなり。

徒然草は兼好法師の作にして、その趣味を談じ、世態・人情を說く間に、著者が修得せる道佛主義の眼鏡によりて、よく皮相の虛飾を透して隱れたる社會の裏面を洞察し、爬羅剔抉、痛快にそが矛盾・撞着のあるところを暴露せり。文章亦暢達にして雅馴、且奇句警語の天外より落ち來るあり。かの枕草子と併せて世に隨筆の雙絕と稱せらる。

此の外、歷史としては神皇正統記・增鏡等最も見るべし。神皇正統記は准后北畠親房の著にして、建武中興の業破れて王道の衰頽せるを憤慨し、古の歷史に照して皇統の正閏を論じ、三種の神器の在るところ即ち名分の存するところなるを疾呼せるものなり。實に國文を以て綴れる議論文の權輿ともいふべく、婉曲なる語句のうちに博大なる氣格を藏し、堂々としてまた朗々たり。增鏡は後鳥羽天皇御即位

の始より、後醍醐天皇が隱岐より還幸せられし時まで、凡そ百五十年間の事蹟を記述せり。記事客觀的にして、毫も著者の主張を交へず。文章流麗にして、よくその模範たる榮華物語を凌ぎ、大鏡の壘にも接せんとす。世に水鏡・大鏡と並べて三鏡と稱せらる。

和歌は其の初期に於て最も盛にして、元久二年には後鳥羽上皇の勅により、藤原家隆等新古今和歌集を撰せり。延喜以降、和歌の勅撰實に八度に及びしが、就中古今と新古今と殊に勝れたり。新古今は其の名の示す如く、よく古今を改造して、加ふるに客觀的敍景の新調を以てし、別途に比較的圓滿なる發達を遂げたるものといふべく、句調流麗、その新奇なることも前古比なしと稱せらる。從つて當時有名なる歌人亦決して少からず。まづ俊成あり、隆信あり、西行あり、寂蓮あり。關白良經は天授の才を以て時流の歌を詠じ、將軍實朝は萬葉の古調を喜びて金槐集を作る。定家は俊成の子にして、家隆と共に名匠の譽一世に高く、前者が措辭の巧緻を喜べば後者は最も暢達の調を尚べり。

室町幕府の世になりては、戰亂相繼ぎて隣戰遠攻に干戈相見えざる日とてはなし。一時小康を見たる義滿の代の如き、實は大風到らんとして暫く平穩を持する時の如きのみ。永享に嘉吉に一波は一波より甚だしく、應仁の亂に及びては、遂に急潮突破して、風伯叫び、電將狂ひ、雷神轟く大混亂、京

都を中心として天下をこの混沌溟濛の裡に漂はすこと前後百餘年、上下擧つてその堵に安んずることを得ず、怨嗟の聲うたゝ四方に滿ちぬ。艶麗なる百花は平和なる春にこそ咲誇れ、かくすさまじき亂離の秋にいかでか榮えん。されば文學の如き、全く度外に置かれて、毫も發達すべき餘裕を存せざりしなり。

されど應仁の亂までは、流石に幕威尙地に落ちず、殊に將軍義滿は、柔弱にして遊樂を好み、義政は戰亂に遭へりと雖も社會の辛酸を知らざるが如く、それ〴〵閑居を設けて文雅風流を樂しめり。されば水墨の繪、香茶の技などの發達せしもこの時にして、能樂の勃興に伴ひて當代唯一の文學謠曲を生じたる、實に此の時代なりとす。

謠曲は蓋し當時の僧侶の手になりしもの多かるべく、その中多く佛敎の思想を含む。趣向は幽靈顯れて往事を語り、巡錫の途なる名僧知識の回向によりて成佛するもの多數を占む。詞句は好んで古文辭を補綴すれども、よく皆諧和して球を轉ずる如き好調に富む。

能樂の餘興に狂言といふものあり。その技、能樂の嚴正なるに對して滑稽を旨とし、多くは罪もなき失策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの多く、巧に人情の弱點を捕へて、誇張・過大の脚色、よく人の願を解かしむるものあり。その文は當時の言語をその儘に寫せるものにして率直

愛すべし。

之を要するに、この時代は多少特色ある文學を產ぜざりしにはあらざれども、上に平安朝を承けてその後殿たり、下に江戸時代を起すべき先驅たり、まづは兩盛時を繫ぐ連鎖たる時代と謂ふべし。(日本文學史教科書に據る)

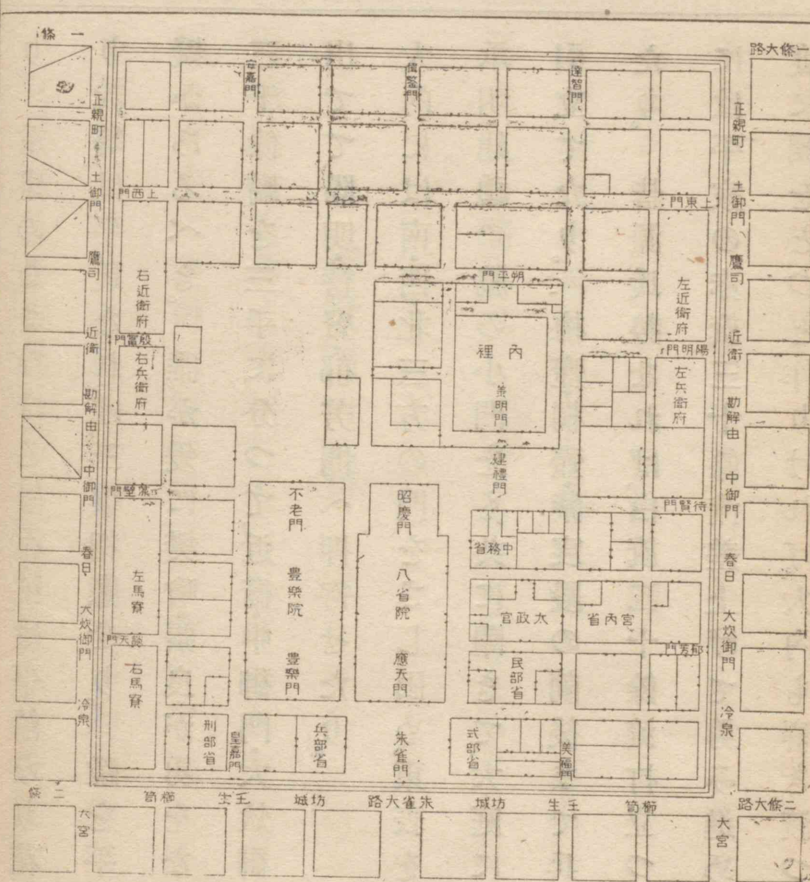
四　待賢門の戰

左衞門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に櫨匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締めて、小烏といふ太刀を帶き、切斑の矢負ひ、重籐の弓持つて、黃鶺毛なる馬に、柳櫻摺つたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛のたまひけるは、「年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。誰か爰に樊噲・張良が勇をなさゞらん」とて、三千餘騎を三手に分つて、近衞・中御門・大炊御門、大宮表へ打出でて、陽明・待賢・郁芳門へ押寄せたり。

樊噲　漢の高祖の臣。勇猛を以て著る。

張良　漢の高祖の臣。智謀を以て著る。

大內には南・西・北三方の門をさし固め、東表をば開かれたり。承明・建禮の脇の小門をも共に開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。梅壺・桐壺・紫宸殿の前後まで兵ひしとなみ居たり。皆源氏勢なれば、白旗二十餘流打立つたり。大宮表には平家の赤旗三十餘流差上げて勇み進める三千餘騎、一度に鬨をどつと作りければ、大內も響き渡つて夥し。



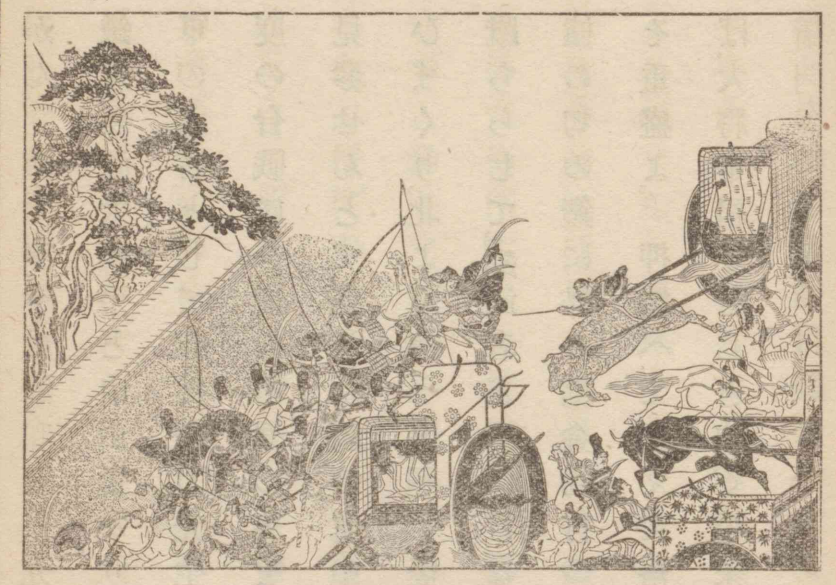
鬨の聲に驚いて、只今までゆゆしく見えられつる信頼卿、顔色變りて草葉の如くにて南階を下られけるが、膝戰いて下りかねたり。人なみなみに馬に乘ら

穆王　支那周代の王。八駿馬を驪りて天下を周遊す。

んと引寄せさせたれども、太りせめたる大の男の大鎧は着たり、馬は大きなり、乘り煩ふ上、主の心には似も似ず、逸り切つたる逸物なれば、つと出でん、つと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかりにて、乘りかねたまふ所を、侍二人つと寄つて、「疾く召し候へ。」とて押上げたり。餘りに押したりけん、弓手の方へ乘つこして、伏樣にどうと落つ。急ぎ引起して見れば、顔に砂ひしと附き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大將として恐れ給ひけるが、はたと睨みて、「あの信頼といふ不覺人は臆したりな。」とて、日華門を打出でて郁芳門へ向はれければ、

信頼鼻血押拭ひ、とかくして馬に搔乘せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用にもあふべしとも見えざりけり。

左衛門佐重盛五百餘騎をば大宮表に殘し置き、五百餘騎にて押寄せて呼はり給ひけるは、「この門の大將軍は信頼卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳淸盛が嫡子左衛門佐重盛、生年二十三。」と名のり懸けゝれば、信頼返事にも及ばず、「それ防げ、侍ども。」とて引退く。大將の引き給ふ間防ぐ侍一人もなし、我先にと逃げければ、重盛愈〻勇みて、大庭の椋の木の許まで攻めつけたり。義朝之を見て、「惡源太はなきか。信頼といふ大臆病人は待賢門をはや破られつるぞや。あの敵追出せ。」と宣ひければ、「承り候。」とて驅け



平治物語繪卷の一部

られたり。續く兵には鎌田兵衛・後藤兵衛・佐々木源三・波多野次郎・三浦荒次郎・須藤刑部・長井齋藤別當・岡部六彌太・猪俣小平六・熊谷次郎・平山武者所・金子十郎・足立右馬允・上總介八郎・關次郎・片桐小八郎大夫以上十七騎轡を雙べて馳向ふ。大音聲を揚げて、「この手の大將は誰人ぞ。名のれ聞

大藏 武藏國比企郡にあり。

かん。かく申すは清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が嫡子鎌倉惡源太義平と申す者なり。生年十五歳、武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしより此の方、度度の合戰に一度も不覺の名を取らず。年積つて十九歳。見參せん」とて、五百餘騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、竪樣横樣十文字に敵をさつと蹴ちらして、「端武者どもに目な懸けそ、大將軍と組んで擊て。櫨の匂の鎧に蝶の裾金物打つて黄鶴毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。押雙べて組んで落ち、手捕りにせよ」と下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども與三左衞門・進藤左衞門を始として百騎ばかりが中にぞ隔りける。惡源太を

筑後守 平家貞。 平將軍 平貞盛。

始として十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻して、組まん組まんとぞ揉うだりける。十七騎に驅けたてられて、五百餘騎叶はじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。大將左衞門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つと參りて、「曩祖平將軍の二たび生れ替り給へる君かな」と向ふ樣に譽め奉れば、今一度駈けて家貞に見せんとや思はれけん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻寄せたり。また惡源太駈向ひ見まはしていひけるは、「只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ、以前こそ洩らすとも今度に

於ては餘すまじ。押雙べて組んで捕れ、兵ども。」と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎われ先にと進みければ、今度は難波次郎・同じき三郎・瀬尾太郎・伊藤武者所を始として百餘騎が、中に隔てたるに事ともせず、悪源太弓をば小脇に掻いはさみ、鐙踏張り突立ちあがり、左右の手を擧げ、「幸に義平源氏の嫡々なり、御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はん、寄れや、組まん。」といふ儘に先のごとく大庭の椋の木の下を追廻して五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、又大宮表へ引いて出づ。

悪源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、「汝が不覺に防げばこそ、敵度々駈入るらめ。あれ速に追出せ。」といひ遣はされければ、俊綱馳せてこの由をいふに、「承り候。進めや、ものども。」とて色も替らぬ十七騎、大宮表に駈出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、「我が子ながらも義平はよく駈けたるかな、あ、駈けたり。」とぞ譽められける。

大將重盛・與三左衞門景安・進藤左衞門家泰主從三騎かけ放れ、二條を東へ引かれければ、悪源太鎌田にきつと目合せて、「爰に落つるは大將とこそ見れ。返せや。」とて追つかけたり。既に堀川にて追つつめけるが、弓手の方に材木多く充ち滿

ちたるに、悪源太の乗り給へる馬かたなづけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手の方へけし飛んで、小膝を折つてどうと伏す。鎌田兵衛延ばさじと、十三束取つて交ひ、よつ引いてひようと射る。重盛の射向の袖にはたと中りて飛返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちようと中りて、箆かつぎ碎けて跳り返れり。悪源太、「これは聞ゆる唐皮といふ鎧ござんなれ。馬を射て、落ちん所を撃て」と下知せられければ、又よつ引いて追ひ様に筈の隱るゝ程射込みたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳ね落され、兜も落ちて大童になり給ふ。鎌田堀川を馳せこえて、重盛に組まんと落ちあふ。重盛近づけては叶はじとや思はれけん、弓

の弭にて鎌田が兜の鉢をちようと突く。突かれてゆらゆるあひだに、兜を取つて打着つゝ緒を強くこそ締められけれ。

與三左衛門馳せよつて中に隔り申しけるは、「漢の紀信は高祖の命に代りて、滎陽の圍を出し、終に天下を保たせき。『主辱しめらるゝ時は臣死す。』といふにあらずや。景安爰に在り、寄れや、組まん」といふ儘に、鎌田兵衛と引組んで取つて押へける處に、悪源太馬引起し、これも堀川を馳せこえて、重盛に組まんと跳んで懸りけるが、「鎌田をや助くる、大將をや撃たん」と思案しけれども、「大將には又も寄せ合ふべし。政家を撃たせては叶はじ」と思ひ、與三左衛門に落ちあうて三刀

刺して首を取る。重盛は「頼み切つたる景安撃たせて、命生きて何かせん」とて既に悪源太と組まんとせられけるを進藤左衛門馳來り「家泰が候はざらん處にてこそ大將の御命をば捨てたまふべけれ」とて、我が馬を引向け、中に隔てゝ悪源太とむずと組む。政家は重盛に組まんとしけるが、主を撃たせては叶はじと思ひければ、進藤左衛門に落ち重なつて首を掻く。この間に重盛は虎口を遁れて六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば助かり難き命なり。（平治物語）

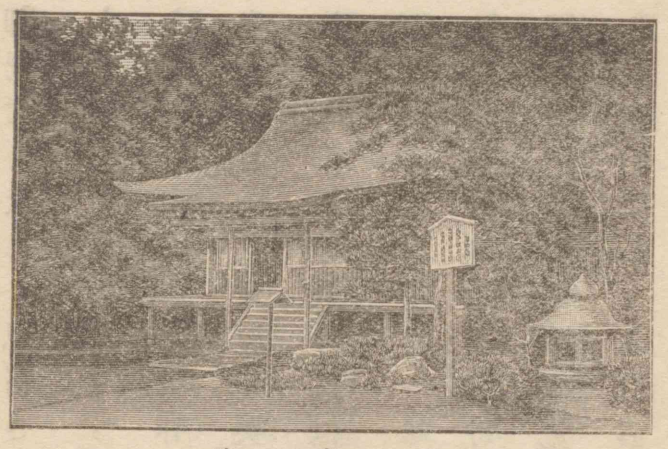
五　大原御幸

法皇　後白河法皇。
建禮門院　平德子。清盛の女。高倉天皇の中宮。
大原　山城國愛宕郡大原村。京都の北四里。高野川の上流。
北祭　賀茂の祭。四月中の酉の日。
補陀洛寺　山城愛宕郡にあり。今廢る。
小野皇太后宮　藤原歡子。關白敎通の女。後冷泉天皇の皇后。

法皇は文治二年の春の比、建禮門院の大原の閑居の御住居御覽ぜまほしう思召されけれども、二月彌生のほどは嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつらゝもうち解けず。かくて春過ぎ、夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。

鞍馬通りの御幸なりければ、かの清原深養父が補陀洛寺、小野皇太后宮の舊蹟叡覽ありて、それより御輿にぞめされける。遠山にかゝる白雲は散りにし花のかたみなり、青葉に見ゆる梢には春の名殘ぞ惜まるゝ。頃は卯月二十日あま

りの事なれば、夏草の茂みが末を分け入らせたまふに、始めたる御幸なれば御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思召し知られてあはれなり。西の山の麓に一宇の御堂あり。即ち寂光院これなり。古う造りなせる泉水・木立、由あるさまの處なり。



寂光院

寂光院
大原村にあり。天台宗。
甍破れては
此の句出所未だ詳ならず。

甍破れては霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燭をかゝぐ。」とは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波のうら紫にさける花、青葉まじりの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より山杜鵑の一聲も、君のみゆきを待ちがほなり。法皇これを叡覽あつてかうぞ遊ばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて、
波の花こそさかりなりけれ。

舊りにける岩の絶間より落來る水の音さへゆゑよしある處なり。綠羅の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及び難し。

さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・朝顏はひかゝり、しのぶ交りの忘草「瓢簞屢空し、草顏淵が巷に滋く、藜藿深く

瓢簞
瓢簞屢空、草滋二顏淵之巷一、藜藿深鎖雨濕二原憲之樞一。橘直幹。

鎖せり、雨原憲が樞を濕す。」ともいひつべし。板の葺目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野べ、いさゝをざさに風さわぎ、世に立たぬ身の習とて、うきふししげき竹柱、都の方の言づては間遠にゆへるませ垣や、わづかに言とふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら、青つゞらくる人稀なる處なり。

建禮門院御木像（寂光院藏）

法皇「人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申すものもなし。やゝありて老い衰へたる尼一人參りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ花摘に入らせたまひて候。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや。御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒・十善の御果報盡きさせたまふによりて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜ませたまひ候べき。」とぞ申しける。この尼の有樣を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬも

阿波内侍像（寂光院藏）

五戒
殺生
偸盜
邪婬
妄語
飲酒

のをむすび集めてぞ着たりける。「あの有樣にてもかやうのことを申す不思議さよ」とおぼしめして、「抑、汝は如何なる者ぞ」と仰せければ、この尼さめ〳〵と泣いて、しばしは御返事にも及ばず。やゝありて涙をおさへて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波内侍と申す者にて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ」とて袖を顏に押當てゝ忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇「げにも汝は阿波内侍にてあるござんなれ。御覽じ忘れさせたまふぞかし。何事につけても只夢とのみこそ思召せ」とて御涙せきあへたまはねば、供奉の公卿・殿上人も各感じ合はれけり。

三尊 彌陀・觀音・勢至。
中尊 彌陀。
普賢 普賢菩薩。
善導和尚 支那隋唐の代の高僧。
八軸の妙文 法華經。
九帖の御書 善導和尚の觀無量壽經の疏九帖。

さてかなたこなたを叡覽あるに、庭の千草露重く籬に倒れかゝりつゝ、そともの小田も水越えて鳴立つ隙も見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子をひきあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚並に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書もおかれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて竹の御竿に麻の御衣、紙の衾なんど懸けられたり。さしも本朝・漢土のたへ

なる類數をつくし、綾羅錦繡の粧もさながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿・殿上人もまのあたり見奉りしことゞも、今のやうに覺えて、皆袖をしぼられけり。

やゝあつて上の山より濃き墨染の衣着たりける尼二人、岩の崖路を傳ひつゝおり煩ひたる樣なりけり。法皇「あれはいかなる者ぞ。」と仰せければ、老尼涙を抑へて、「花筐臂にかけ岩躑躅取具して持たせ給ひて候は女院に渡らせたまひ候。爪木に蕨折添へて持ちたるは、鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言佐局」と申しもあへず泣きけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の殿上人も皆袖

建久九年 後鳥羽天皇の御宇（一八九八）。

御子 土御門天皇。

をぞぬらされける。女院は「世を厭ふ御習といひながら、今斯る有樣を見え參らせんずらんはづかしさよ。消えも失せばや。」と思召せども、かひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、掬ぶ袂もしをるゝに、曉起の袖の上、山路の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へも歸らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず。あきれて立たせまし〳〵たる處に、內侍の尼參りつゝ花筐をば賜はりけり。（平家物語）

六 霞の洞

建久九年正月十一日第一の御子四つになり給ふに御位ゆづり申させ給ひており給ふ。御年十九。位におはします

こと十五年なりき。今日明日二十ばかりの御齢にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ處せき御有様よりはなか〳〵やすらかに、御幸など御心のまゝならんとにや。世をしろしめす事は今もかはらねば、いとめでたし。鳥羽殿・白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡りすませ給へど、なほ又水無瀬といふ處にえもいはずおもしろき院づくりして、しば〳〵通ひおはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても御心ゆくかぎり、世をひゞかして遊

後鳥羽天皇（攝津國水無瀬宮藏）

をのみぞし給ふ。處がらもはる〳〵と川に臨める眺望いとおもしろくなん。元久の頃詩に歌を合せられしにも、とりわきてこそは、

見渡せば山もと霞む水無瀬川、
ゆふべは秋となに思ひけん。

茅葺の廊・渡殿など、はる〳〵と艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧落されたる石のたゝずまひ、苔深きみやま木に枝さしかはしたる庭の小松もげに〳〵千代をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々あまた召して御遊などありける後、定家の中納言いまだ下臈なりける時に奉られける。

あり經けんもとの千年にふりもせで、
　わが君ちぎるみねのわか松。
君が代にせき入るゝ庭を行く水の
　岩こす數は千代も見えけり。（增鏡）

日蓮
日蓮宗の開祖。建長五年（一二五三）開宗。文永十年（一二七三）甲斐國身延山に入る。弘安五年（一二八二）寂す、年六十一。

七　芋を贈られしに

日　蓮

家の芋一駄贈り給ひ候。崑崙山と申す山には玉のみありて石なし。石乏しければ、玉をもて石を買ふ。彭蠡濱と申す浦には木草なし。魚をもて薪を買ふ。鼻に病ある者は栴檀、香用に非ず。眼なき者は明かなる鏡何かせん。此の身延の澤と申す處は甲斐國波木井の郷の内の深山なり。西には七面のがれと申す嶽あり、東は天子の嶽、南は鷹取の嶽、北は身延の嶽。四山の中に深き谷あり、箱の底の如し。峯には巴峽の猴の音喧し。谷には磊磈の石多し。然れども駿河の芋のやうに候石は一つも候はず。芋の珍しき事暗き夜の燈にも過ぎ、渇ける時の水にも過ぎて候ひき。如何に珍しからずとは遊ばされて候ぞ。されば、それには多く候歟。あらこひし、あらこひし。法華經・釋迦佛に讓りまゐらせ候ひぬ。定めて佛は御志を納め給ふなれば、御悅び候らん。靈山淨土へ參らせ給ひたらん時、御尋あるべし。恐々謹言。

況後　而此經者如來現在猶多二怨嫉一況滅度後。法華經、

高山樗牛　名樗林次郎。評論家。文學博士。明治三十五年歿す年三十四

伊東　弘長元年(一二六一)執權ノ條時頼に、伊豆の伊東に流さる。

龍の口　文永八年(一二七一)執權北條時宗に相模の龍の口にて斬られんとして免る。龍の口は鎌倉の西一里にあり。

佐渡が島　同年佐渡に流さる。十年赦されて歸り身延山に入る。

八　況後錄

高山樗牛

伊東に死なず、龍の口に斬られず、不思議に存へし命も、此處佐渡が島を今は最後の地と覺ゆるぞ。あら嬉しや、人々、此程の喜をば笑へよかし、日蓮程の果報の者また世にあるべしや。古より君の爲に死せしもの、親の爲に死せしもの、妻子財寶の爲に死せしものはあれども、法華經の爲に命を捨てしものありや。是の教の爲に臭き頭を刎ねられんは、砂に黄金を代へ、糞に米を替ふるに同じ。今こそは霜露の日影を待つばかりの命ながら、化城の迷遙かに去りて、靈山の開顯眼前にあり。頸は鋸にて引きも切られよ、胴は稜鋒も

て貫かれもせよ、足には絆を打ちて錐鑽にもせよ。この息の根の通はん程は、南無妙法蓮華經の聲をよも絶たじ。吾は是粟散の邊土、安房東條の旃陀羅が子、身賤しくして性劣れり。智解に於ては天台傳教が千分の一にだに及ばじ。

高山樗牛

されど法華經の行者なるが故に即ち是一天の眼目、四海の柱石たり。六難九易の教、三障四魔の說は素より熟く知れり。唯、末法不祥の世に生れたる身の、法王の宣旨默し難く、身命を拋つて救世の大願に志し、茲に權實二教の軍を起し、忍辱の鎧を着、妙教の劍を提げ、一

部八卷の肝心妙法五字の旗を指上げ、一代の風雲を捲起して折伏の戰に從ふこと、こゝに二十餘年。あはれ、法華經の行者が爲すべき程の軍は、日蓮ほゞ仕遂げたりと覺ゆるぞ。是の經の爲には大覺世尊だに九横の大難に値ひたまひき。不輕菩薩は杖木瓦石を被りき。竺の道生は蘇山に流され、法道三藏は面に火印をあてられ、天台大師は南三北七の仇となり、傳敎大師は六宗に憎まれ給ひき。日蓮こそは居所を逐はるゝこと二十餘度、敵人の戕害に臨みしこと三たび、一度は頸の座に据ゑられ、二度は遠流の罪に行はれて、今やこの北海の孤島に明日をも知らぬ命とはなりたるぞ。あら嬉しや、喜ばしや、古賢先聖だに讀み給はざりし妙法の極意をば、今ぞ日蓮こそは讀みたんなれ。勸持品二十行の偈は、日蓮だに此の國、此の世に生れ、別して此の島に流されずば、世尊一代の大妄語となり果てなんず。如何に人々、一代聖經の付屬はまさしく日蓮が頭に懸れりと覺えたり。是程の譽をば祝へよかし。是程の慶をば笑へよかし。日蓮最早この世に望む所なし。

されど、顧みれば心地好きわが來し方かな。三類の強敵は吾が爲の善知識ならずや。北條氏無くば法華折伏の本意を如何にすべき。本法付屬の未來記は、まさしく日蓮が生涯に記されたり。刀杖瓦石もて身に流されたる日蓮が血潮はやがて妙法勝利の願文に染められたり。昔者半偈の

爲に身を投げ、肱を折りしものすらありしを、日蓮が身の幸を如何にとか見ん。中にも龍の口の頸の座こそ面白かりけれ。いで〳〵一期の思出に、日蓮が今生の不思議を書き遺さんず。（下略）（樗牛全集）

シテ　天女。
ワキ　白龍。
ワキヅレ。漁夫。

風早の
風早の三保の浦わを漕ぐ舟の舟人騒ぐ波立つらしも。
萬葉集。

萬里の好山
千里好山雲乍斂、一樓明月雨初晴。

九　羽衣

風早の三保の浦わをこぐ船の浦人さわぐ波路かな。

「是は三保の松原に白龍と申す漁夫にて候」。

萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨はじめて晴れたり。實に長閑なる時しもや、春のけしき、松原の浪立ちつゞく朝霞、月も殘りのあまの原、およびなき身の詠にも心そ

風むかふ
風むかふ雲のうき波立つと見て釣せぬ先に歸る舟人。
藤原爲相。

らなる氣色かな。忘れめや、山路を分けてきよみ潟、はるかにみほの松原に立連れ、いざや通はん。風むかふ雲のうき波立つと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし、春ならば吹くものどけき朝風の松は常磐の聲ぞかし。波は音なき朝なぎに釣人おほき小舟かな。

「われ三保の松原にあがり、浦の景色をながむる處に、虛空に花降り、音樂聞え、靈香四方に薫ず。是、唯事と思はぬ處に、これなる松に美しき衣懸れり。寄りて見れば、色香妙にして常の衣にあらず。如何樣、取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候」。

「のう其の衣は此方のにて候。何しに召され候ぞ」。

「是は拾ひたる衣にて候程に、取りて歸り候よ。」

「其は天人の羽衣とてたやすく人間に與ふべきものにあらず。もとのごとくに置き給へ。」

「そも、此の衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。」

羽衣　能

「悲しやな。羽衣なくては飛行の道もたえ、天上に歸らんことも叶ふまじ。さりとては返したび給へ。」

此の御詞を聞くよりも、愈、白龍力を得、固より此の身は心なきあまの羽衣取隱し、「叶ふまじ。」とて立退けば、今はさながら天人も羽なき鳥のごとくにて、あがらんとすれば衣なし。地にまた住めば下界なり。とやあらん、かくやあらんと悲しめど、白龍衣を返さねば力及ばず、せんかたもなみだの露の玉鬘、かざしの花もしをしをと、天人の五衰も目の前に見えてあさましや。

天の原ふりさけ見れば霞たつ雲路まどひてゆくへ知らずも。住みなれし空にいつしか行く雲の羨ましき景色かな。

迦陵頻伽の馴れ〳〵し、聲、今更にわづかなる雁がねの歸りゆく天路を聞けばなつかしや。千鳥・鷗のおきつ浪、往くか、還るか。春風の空に吹くまでなつかしや。

「いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候程に、衣を返し申さうずるにて候」。

「あら嬉しや。此方へ賜はり候へ」。

「暫く。承り及びたる天人の舞樂、唯今こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし」。

「うれしや。さては、天上に歸らんことを得たり。この喜に、とてもさらば人間の御遊の形見の舞、月宮を廻らす舞曲あり。唯今こゝにて奏しつゝ世のうき人に傳ふべし。

さりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとては、まづ返し給へ。」

「いや、此の衣を返しなば、舞曲をなさで、そのまゝに天にやあがり給ふべき」。

「いや、疑は人間にあり。天に僞なきものを」。

「あらはづかしや。さらば」。

とて羽衣を返し與ふれば、少女は衣を着しつゝ霓裳羽衣の曲をなし、天の羽衣風に和し、雨に濕ふ花の袖、一曲をかなで舞ふとかや。東遊の駿河舞、此の時や始なるらん。

それ久堅のあめといつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空はかぎりもなければとて、ひさかたの空とは名

春霞
春霞たなびきにけり久方の月の桂の花や咲くらん。
紀貫之。

天つ風
天つ風雲の通路ふきとぢよ少女の姿しばしとどめん。
僧正遍照。

君が代は
君が代は天の羽衣まれにきてなづともつきぬいはほなるらん。
讀人不知。

づけたり。然るに月宮殿の有様、玉斧の修理とこしなへにして、白衣・黑衣の天人の數を三五にわかつて一月夜々のあまをとめ、奉仕を定め、役をなす。我も數ある天少女、月の桂の身をわけて、假に東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。春霞たなびきにけり、ひさかたの月のかつらの花や咲く。げに花かづら、色めくは春のしるしかや。面白や、天ならでこも妙なり。天つ風、雲の通路吹きとぢよ。少女の姿しばしとゞまりて、此の松原の春の色をみほがさき。月きよみがた、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひなみも松原ものどかなる浦の有様。其の上、天地は何を隔てん、玉垣の内外の神のみすゑにて、月も曇らぬ日の本や。君が代は、あまの羽

孤雲の外
笙歌遥聞孤雲上、聖衆來迎落日前。寂昭。

三五夜中
三五夜中新月色、二千里外故人心。
白樂天。

衣まれにきて、撫づとも盡きぬいはほぞと聞くも妙なり、東歌。聲そへてかず〳〵の笙・笛・琴・箜篌、孤雲の外にみちみちて、落日の紅はそめいろの山をうつして、綠は波にうき島がはらふ嵐に花ふりて、實に雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。南無歸命月天子、本地大勢至。

東遊の舞の曲。あるひは天つみそらの綠の衣、又は春たつ霞の衣。色香もたへなり、少女のもすそ。左右左さいう颯颯の花をかざしのあまの羽袖。なびくもかへすも舞の袖。東遊のかず〳〵に、其の名も月の宮人は、三五夜中のそらに又滿願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。

さる程に、時移つて天の羽衣浦風にたなびきたなびく三保の松原、浮島が雲のあしたか山や富士の高嶺、かすかになりて、天つ御空の霞にまぎれて失せにけり。（觀世流謠曲）

宮内 後鳥羽天皇の宮女。元暦ごろの人。

寂蓮 藤原定長。もと俊成の養子。建仁二年（一二〇二）寂す、年未詳。

一〇 比良の山風

五十首歌奉りし中に　宮内卿

湖上花を

花さそふ比良の山風ふきにけり
こぎゆく船のあと見ゆるまで

五十首歌奉りし時　寂蓮法師

藤原家隆 宮内卿。俊成の門人。嘉禎三年（一二三七）薨ず年八十。

西行法師 佐藤義清。建久元年（一一九〇）寂す年七十三。

摂政太政大臣 藤原良經。建永元年（一二〇六）薨ず年三十八。

雲ゐゆく雲のみなとい知らねども
霞ていおつる宇治のしば舟　藤原家隆朝臣

時しらぬ世む来ぬ夜あるくの杜鵑
待ちどおりつば村雨のそらに

題知らず　西行法師

心あて身にもあはれと思はれけり
しぎたつ澤の秋の夕ぐれ

五十首歌奉りし時　摂政太政大臣

ものを思ふたちこひはてくる秋のぜを

藤原定家
俊成の子。中納言。仁治二年（一九〇三）薨ず年八十。

俊成
藤原氏。五條三位と稱す。元久六年（一八六四）薨ず年九十一。

松ちりのこりて月ぞ見る哉
ちりそこなりし時　藤原定家卿
駒とめて袖うちはらふかげもなし
さびしさはあきの夕ぐれ
宮家朝夕ごの母身よりしほ秋の
うら墓所近き堂にとまりてよもの
侍りける　皇太后宮大夫俊成
まがりまるる夜もしかなきまつ風を
ふるぞわぶ苔のしたぶきくるむ

綱島梁川
名は榮一郎。倫理學者。明治四十年歿す年三十五。

あれこれを
あれこれを集めて春は臘かな。芭蕉。

一一　秋の力

綱島梁川

「あれこれをあつめて霞む春の臘」を人生の夢とも見ば、秋は直にこれ覺醒なり、事實なり。蔦紅葉の中より露れ出づる節くれだちし樹身、枯芝生の底より躍り出づる偃蹇たる雲根、何れか秋は人に迫る事實たらざる。

中にも秋の力を最も強く贍かに言出づるものは黄柚なり、赤柿なり。一美術家語りて曰く、「吾嘗て終日秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會、夕空鮮かに生り出でたる赤き柿の實の累々たるを見て、始めて秋こゝにありと叫びき。」と。げにも秋の姿をさながらに具象にして描き出せるものあり

とせば、そは碧落の空に躍如として生り出でたる赤柿を措きてはまたとあらじ。　秋は實に此の累々たる赤柿に其の全幅の表現を得たる趣あるに非ずや。　その昔蕪村・抱一などの畫家が寥々たる此の一物に大膽なる落想をこめて、一幅の秋のこゝろを勁く、隈なく淋漓揮灑し出せる詩眼、流石に凡にはあらざりけり。

見よ、秋の潭に淵默の智あり、秋の空に剛明の象あり。　月は清輝を帶び、星に聲あり。　落葉にうづもるゝ枯井の水、猶鬚眉を鑑すべく、夢を歌ふ滿園の蟲しぐれ、人の深省を誘ふ。空際きはやかに走る波濤の山、極目鮮かにくねる一河の帶、樹間の聲の錚々として勁き、天籟地籟の砰湃として厲しき、

蕪村
興謝氏。俳人。畫家。天明三年（一七八三）歿す年六十七。

抱一
酒井氏。畫家。文政十一年（一八二八）歿す年六十八。

あはれ秋の萬象、何物かすべてこれ透明・照徹・剛克・雄健の一氣を以て貫かざる、何物かすべてこれ哲人の雄姿、道士の風岸を以て人に迫らざる。　秋は夢に非ずして事實なり。　人は秋に立つて、直に事實と面相接するなり。

秋は何等の天文・地采の形式を藉らざる裸體のまゝなる思想なり。　そは如々なり、故に明瑩なり、澄徹なり、而して又充實なり、豐贍なり。　春草の紗、夏木の衣、すべて名殘なく脫ぎすてゝ、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くもまた雄々しき丈夫神の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。　若し秋に一味の文采ありとせば、白蘋紅蓼の裳裾、蘆花淺水の帶、桔梗・刈萱・尾花が波の袂も輕き姿なるべし。　あはれ其の澹如たる

すゞしさは、彼の哲人道士の婆娑たる一衣の高風にも似たるかな。至竟秋の力は其の衣にあらずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。（病間錄）

一二　江戸時代の文學

藤岡作太郎

江戸幕府の世は、泰平打續きて、殆ど干戈の動くを見ず、文化の進歩前古に比なし。獨りこれに對比すべき平安朝の文化も、貴族が占むるのみにして、庶民は與らざりしが、この時代はこれに異なり。學問・藝術上下に弘通して、四民ともにその德を享け、文學の滋味も普く味はるゝに至れり。されど幕府の施設漸く成るに從ひて、戰國の世に壞れかゝりし階級の制も更に立ち、從うて文學にも貴賤の別なきを得ず。上流の人は詩歌を詠じ、下流は俳諧を玩び、彼は學問にわたるものを喜び、此は戲曲・小說の類を愛し、彼は古文を墨守して固陋に流れ、此は新作に傾倒して卑俗に陷る。學識あるものは新興の文學を卑しみ、新興の文學に就くものはみづから低うして高尙なる趣味を解せず。かくて戲曲・小說の如きは、戲作を以て目せられ、正當なる文學上の地位を得ること能はざりき。

この時代に著しき思想界の現象は、儒敎が佛敎に代りて勢力を得たることなり。佛敎の上下を通じて普く行はれたることは變らずといへども、寺院には領地あり、檀那ありて、

富有なるがまゝに、僧侶は漸く安逸に馴れて、布教を怠れり。この時、儒教は勃然として興り、力めて修身・治國・平天下の道を唱べしかば、世人を導いて文化の域に進ましむるもの、今は佛にあらずして儒なり。されど佛教の從來養ひ得たる佛教の感化もまた侮るべからず。國學の新に起りて、わが國本來の道を明めんとしたることも、また注意すべし。殊にこの時代の人心を支配したるは武士道なり。武士道は日本固有の廉潔尚武の精神に、人倫五常の別を明かにする儒教の意と、生死を離れ進んで惑はざる佛教の旨とを折衷し、これを古來の戰亂に鍛へて成りたるものにして、この時代に至りて最も光彩を發揮し、武士はこれを以て造次にも怠るべからざる大道とす。その朴直を守りて浮華を斥け、感情を卑しみて義理を重んじ、婦人の勢力を無視するは、著しく平安朝に相違せる要點にして、また武事を偏重するより、時に殺伐に流るゝ弊なきにもあらざりき。

今江戸時代の文學を概説せん。

一、漢學　德川家康馬上に天下を得たりと雖も、馬上に之を治むべからざるを知り、佚書を蒐集し、古書を刊行し、漢儒を重用し、以て文學復興の機運を開けり。

馬上　陸生時々前說二誦詩書一。高帝罵レ之曰迺公居二馬上一得レ之安事二詩書一。陸生曰居二馬上一得レ之。寧可下以二馬上一治ち之乎。史記。

將軍綱吉特に漢學を好み、儒者を禮せしかば、學者輩出し、文華一時に煥發す。所謂元祿時代是なり。木下順庵は京の人、のち江戸に出づ。その學博通不偏を旨とし、門下に雨森

芳洲・新井白石・室鳩巣等、著名の士多し。伊藤仁齋京に起り、朱學は孔・孟の古意にあらずとして、別に古學を立て、その子東涯博覽にしてよく父の學を祖述す。荻生徂徠江戸にあり、また朱學を駁し、六經を重んじて古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙す。その門人のうち、太宰春臺は經義に通じ、服部南郭は詩文をよくせり。筑前の貝原益軒も當時の碩學なり。その書を著すや、概ね平易にして實益あらんことを期し、普通文に記して丁寧深切なり。江戸の新井白石は將軍家宣及び家繼に仕へて政務に參與す。學博く、識高く、わが國の歷史・制度・語學等に關して有益の著多く、行文犀利にして透徹せざる所なし。眞に古今を通じて稀なる文豪なり。

後、文化・文政の頃に至りて、太田錦城等また折衷學を唱へ、黨を分ちて相爭ふ。奥州白河の城主松平定信之を患ひ、林家の私學を幕府の有として昌平黌と稱し、林述齋をして之を統べ、柴野栗山等をして之を助けしむ。また朱學を奉ぜざるものは官職に就くことを得ざらしめたり。之を異學の禁といふ。此の時にあたり、關西には賴山陽の如き文豪あり、天與の詩才を驅つて日本外史の大作を著し、盛に尊王愛國の主義を鼓吹したり。

二、國學　元祿時代に於て和漢の文學に大功ありしを水戸侯光圀とす。彰考館を開きて大日本史を撰す。その學の

重んずる所、大義名分を正すにありき。光圀また古典の研究に志あり。下河邊長流に託して萬葉集を註釋せしむ。長流業を終へずして歿し、釋契沖その業を繼ぐ。契沖國文を好み、造詣至りて深く、識見世に絶す。その著述少からず。享保の頃、京に荷田春滿あり。國史・律令に通じ、古意を明らむるを以て己が任とす。いはゆる國學とて古典を究めて國體のある所を學ぶは、この人に起れるなり。幕末勤王攘夷の説の沸騰せるは、水戸の學と國學との感化與りて力ありき。

賀茂眞淵は遠江の人、京に出でて春滿に學び、學成りて後、江戸に來りて講説し、田安宗武に仕へて厚遇せらる。その學は春滿に繼いでわが國固有の道を明かにするにあり。謂へらく、「昔、儒佛の教の傳はりしより、古道はこれがために廢れぬ。故に古道を明らめんとせば、外國の影響なくして、人意の自然に出でたる古書を學ばざるべからず。その古書は萬葉集最も善し」と。よりて、深くこの書を究む。識見甚だ高しと雖も、詩文の才は寧ろ學問に勝れり。門下に高材の士多くして、これより國學の勢、天下を席卷するに至れり。眞淵の門人多きが中に、伊勢の本居宣長、江戸の加藤千蔭・村田春海等、最も名あり。宣長の學は一に古道を明らむるにあり。古道を知るには古事記最も貴ぶべしとして、その註釋に從事し、三十五年を經て業成る。即ち古事記傳にして、

以てその深遠なる學と穩健なる見とを見るべく、實に契沖の萬葉代匠記とあはせて江戸時代國文學界の二大作なり。宣長なほ多くの著述あり。門流甚だ盛なりしが、歿後の弟子伴信友・平田篤胤最も著る。篤胤は出羽の人。その意宣長より一歩を進めて、古道を以て一の宗教とし、之を弘布して儒佛の教を斥けんとするにあり。勤王攘夷の說は是等の論によりて、益〻刺戟せられたり。當時、京の文壇は寂寥たりしかど、香川景樹の歌道を一新したる功は特筆大書せざるべからず。景樹の一派を桂園流といひ、大いに世に行はれたり。

三、俳句　俳句は元祿のころ伊賀の人松尾桃青(芭蕉翁)京に出でて北村季吟に學び、後江戸に來りて正風を起し、又東西に周遊して吟腸を養ひ、その風を擴む。詠ずる所人事より も自然に多く、幽玄淸淡にして廣く雅俗にわたる。四方翁然として靡き、俳句これより遍く都鄙に行はる。門人に俊秀の士多し。その後風調漸く卑俗に流れしかば、天明の頃これを慨して革新を唱ふるもの東西に起れるが中に、京の谷口蕪村その最たり。蕪村好んで自然の景物を詠じ、漢詩の趣を傳へ、よく歷史的事實を材料とす。桃青と相並んで斯道の二聖とすべし。横井也有は尾張侯の臣、殊に俳文をよくして、淡雅輕妙なり。

四、戲曲　戲曲は謠曲等より出で、江戸時代に至りて大いに

發達せり。元祿の頃、近松門左衞門あり、京に住み、のち大阪に移り、盛に戲曲を作る。寫す所、人情の祕奧を穿ち、才藻涌くが如く、行筆の自在なること行雲流水に似たり。ついで竹田出雲あり、文才は門左衞門に及ばずと雖も、趣向の變化に富めることは却つて勝り、今日世に行はるゝはその作に多し。

五、小說　小說は最初京阪に榮ゆ。就中井原西鶴は文辭輕妙にして觀察精緻なり。文化・文政の頃に至り、江戸に作者輩出せり。中にも曲亭馬琴は學問該博にして文藻絢爛なり。椿說弓張月・里見八犬傳等人口に膾炙する著作多く、一篇出づる毎に、世人爭うて之を求む。その趣、一に儒敎によりて專ら勸善懲惡を旨とせり。その頃京都に上田秋成あり、筆力雄勁にして鬼才と稱せらる。化政の文學は實に江戸時代掉尾の偉觀と謂ふべし。（新體日本文學史敎科書に據る）

室鳩巢
名は直淸。德川幕府の儒官。享保十九年（一七三四）歿す年七十七。

一三　月は世々の形見

室鳩巢

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋のけしきたちて荻吹く風も身にしむ頃なり。「久しく翁がり音づれねば、このほどの老のねざめも覺束なし。いざとぶらはん」とて、ある夕暮に例の人々うちつれて來りぬ。「またも參らん」とて歸らんとするを、翁とゞめて、「今宵は月もよし、薄酒進め奉らん。しひてとまり給へ」といへば、「翁の心をいかでそむくべき。

さあらば。とておの〳〵座をしめて清談の露やう〳〵繁き程に、家人やがて心得て、とりあへずあるじまうけし、肴とりそへて盃出しけり。諸客皆醉うて興に入るとぞ見えし。

其の中に一人盃を停めて、

青天有月來幾時、我今停盃一問之。

と李白が詩を高らかに打吟じけるを、又二人脇よりつけて

人攀明月不可得、月行却與人相隨。

と歌ふ。又外の人々迭に唱和して、其の次を、

皎如飛鏡臨丹闕、綠煙滅盡清輝發。

と歌ふ。又其の次を

但見宵從海上來、寧知曉向雲間沒。

青天有月　唐李白「把酒問月」の詩。

白兎搗藥秋復春、姮娥孤棲與誰隣。

と歌ふ。其の次よりは翁も助言して、

今人不見古時月、今月曾經照古人。

古人今人如流水、共看明月皆如此。

惟願當歌對酒時　月光長照金樽裏。

とうたひをさめけり。其の後數獻に及びて玉山頽るゝばかりに見えけり。さて翁いふやう『大かたは月をもめでじ。』とはよみたれども、老の心も月みるにぞなぐさみ侍る。されどそれにつきて千載無窮の感も起りぬれば、むべ月を『人の老となる』ともいふべかめり。但し月を見るにいろ〳〵あり。今思ひ出し侍り、童子の時、家にて八月十五夜の宴に

大方は　大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの。在原業平。

月みるにぞながむるに物思ふことのなぐさむは月はうき世のほかよりや行く。大江爲基。

獨り隅に向ひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが月をつく〳〵と見て、『月は徑幾尺かあるべき、各〻考へて見たまへ。』といふ。また同じやうの人かたへより、『あれは物の切口とみゆ。奥へ長さいかほどかあらん。』とてたがひに僉議しけるを、きく人々皆舌を喰ひけり。翁もをさな心にをかしかりき。今おもへば、世俗月を賞して光のあかきをほこり、影のきよきにめでて、良夜とてたゞ打寄り物喰ひ酒のみなどして歌ひのゝしるを樂みとするは、かの寸尺を語るに等しかりぬべし。又騷人墨客の月を詠めて、字毎に金玉を雕り、句毎に錦繡を裁するも風雅に聞ゆれど、それもたゞ景氣の上を翫ぶばかりにて、月に深き感ある事を知らぬなるべ

し。翁が千載無窮の感と申すは、わが儕古人を慕ひて其の書をよみ其の心を知りつゝ、常に世を隔つる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照し來て今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影も映るやうに覺え、月はものいはねども語るやうにも覺え、忘れては昔の事を問はまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣をすてゝ一氣に古今を洞觀して、『青天有月來幾時』といひ出づるより、氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも外の詩人の及ぶべき事柄にあらず。昔より李杜とて杜甫が上に稱するもことわりにてこそ侍れ。然れども李白の詩も古今流水の如きを感ずるまでにて、後

往者余弗及 楚辭の遠遊篇。
屈子 楚の屈原。

代を待つ心は見えず。翁むかし楚辭をよみて、「往者余弗及、來者吾不聞。」といふに至りて、屈子が心をおしはかりつゝ感にたへずなん覺えし。此の二句の意をいふに、屈子一代に知己なきをかなしみて、古人は誠にわが心を得たればあはれ一度あうて語らんと思へど其の世に及ばねばかなはず、又末の世にさる人ありてこそ我と心を同じうすらめと思へど、其の人をきかねば誰とか知らんとなり。是は屈子に限らず、古今心あるきはゝ大かた此の恨なきにしもあらず。翁も此の心にして月を見るにや、いとゞ感深く覺ゆるなり。もとより今は末の世の昔なれば、いづれの世にか又わがごとく月に對して今を忍ぶ人もやあらん。月はさこそ其の世をも照すらめ。もしあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をも殘さましと思ひ侍り。そのこゝろを

月みれば末の代までもしのばれて
見ぬいにしへのいとゞゆかしき。

こゝをもて翁が月に無窮の感ありといへるを諸君考へ見たまへ、いはれなきにはあらじ。」となんいひける。（駿臺雜話）

上田秋成 大阪の人、京都に住む。國學者。文化七年（一八一〇）歿す年七十八。
鎌倉の大將 源頼朝。

一四 西行法師

上田秋成

文治それの年八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかうまつる人々、御前おひ、御あとべつかうまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾か

らず、遲からず、つらを亂さずねり出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、かしこみたいまつれる人數多あるに、お前拂ひしてあなとだにいはせず、世にいかめしく貴き御有樣なり。かへりまをしして御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣のもとに畏りをる法師のあなるが、見上げ奉る面つき、なほ人ならずと思しけん、御輿ぞひの若侍して問はせ給ふ。ゆくりなきに驚きたる樣して、「雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申す」といふ。聞召されて、「さればこそ聞知りたれ。穴熊のたけき獲物の類ならで、賢き人得たるためしに、誘ひかへらん。わがあとに連れて來れ」とて召連れさせ給へり。

穴熊の　西伯將レ獵、トレ之曰、非レ龍非レ彲、非レ熊、非レ羆、所レ獲霸王之輔。與遇二呂尙於渭水之陽一。史記。

御館に入らせられ、御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあまた照しかゞやかせ給ひて、おまし近き處の一間なる簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、「昔藐姑射の山の宮仕せし人の、世をはかなきものに思ひなして、身は黑うやつれたれど、月花のなげきの譽は、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。弓取る人のもとの心の猛きには、よむ歌も直くあからさまと聞くはまことか。武士のあら〳〵しき心には詠みうつし得まじきものに宮人達は沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、笛・鼓の音、馬のいなゝきは物とも思はぬを、この三十文字あまりのまなびには心の後るゝはいかに。」「こはかしこき御心にも思し惑はせ給ふものか。古の

代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢とらして、軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛くすくよかに、調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まんとては、益荒雄心をとり隱し、あてになよびかに詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君が御心のとくたけきまゝにうちいで給はんには、今の人誰かは立ち並び奉らん。三尺の劍を執りて『大風起り、雲飛揚す。』とうたひ、槊をよこたへて、『烏鵲南にと詠ぜし君達は、鞍の上にて、文に遊ばせ給ふならずや。』と云ふ。「人々、あれ聞き給へ。世は捨てたれどたのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓矢の上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこ

大風起り　大風起今雲飛揚。漢高祖。
烏鵲南に　月明星稀烏鵲南飛。魏曹操。

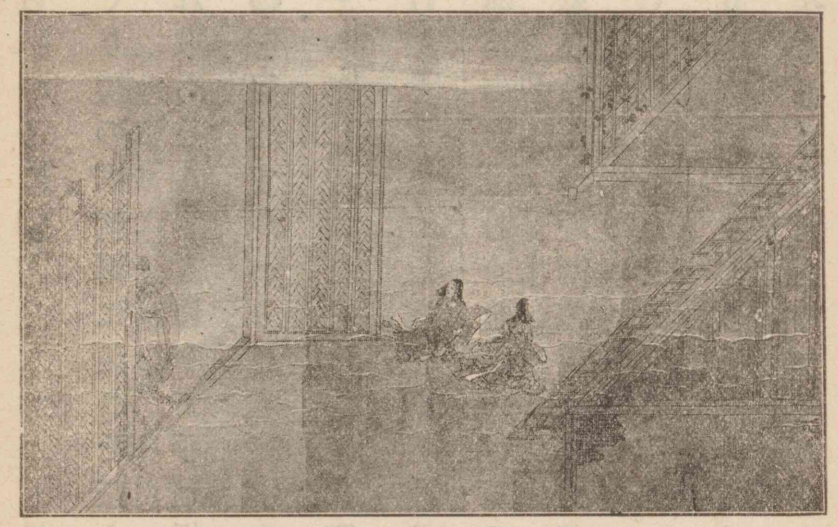
そと思ひしみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にても教へ承るべし。」「こは益〻恐ある御問はせなり。つは者の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの痩法師にさへ物問はせ給ふことのかたじけなさよ。向ひ奉りては、をこがましく家の傳なりなど、聞え奉るべうも覺えはべらず。ましてありがたき大宮仕をいなみ奉り、親のいつくしみをさへあだなるものにして、年纔かに二十五にて家を出でたるいたづら者の、弦ひき一つだに心に留めしことも侍らず。たゞ一言の忘れがたきは、『賞を重くし、罰を輕くせよ。』といひしと、『任ずる者を辱むれば危し。』といひしとのありがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは人の心をよ

疽を吮ふ　衞の吳起。

寵を減す　齊の孫臏。

く買ひなすと雖も、誠の情よりとも覺え侍らず。寵を減して人を危きに落し入るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め、天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出したまへることの、あやしきまでかしこくませるを、餘所ながら見聞き奉るには、この御問ゆるさせ給へ。」とて、額を板敷に摺りつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ、「口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今は果してん。人々と土器とりはやし、曉かけて遊ばん。まれ人は酒飲まざるべし。鹿猿のなかに立交りて、歌よめといふともよむまじ。たゞわが前に遊べ。風冷かなるにも飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々



西行銀猫を與ふ（西行物語東京帝室博物館藏）

は、暖かにもこそ。この火取、法師に參らせよ。」とて、白銀もてつくりたる猫のかたちしたるを、取傳へて、君より賜ふとて、前に置きたり。「鹿猿は尙心たけし。鼠をだにえとらぬ瘦法師が爲には、似つかはしき御賜ぞ。」とて、三度おしいたゞきぬ。

あした御暇たまはりて立

ちいづるに、御館の人やどりに、誰が殿のわらはべならん、くくり袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、「これ取らせん。火埋みて手足煖めよ」とて、かのきら〳〵しき物を與へて、かへり見もせず立ち去りぬ。童が主なる人、「いとあやし。大將殿の法師に賜はせしを、いかで童に得させけん」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君うちゑみ給ひ、「かの法師、あなづらはしくをさなげなる物くれしとて、腹だたしくや思ひけん、わが門の前に捨て行きつるよ。法師とて、男魂なくば修行もえせぬなるべし。されど家を出で、なほ才に誇りて、野山にまじり、歌詠みてのみあるは、世捨人の捨てらるべきあさましさぞかし。一度けがれし物、その童に取らせ

よ」とて、とりおろさせ給ひぬ。

西行、後にこのことを人に語りていふ、「右府はまことにねじけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟德の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふものを、生れながら得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、この後やうやう衰へさせ給はん世の姿なるは」とて、涙とゞめ難くして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞き傳へては、秋の夕暮ならずもうちひそみぬべし。（籐簍冊子）

井原西鶴

井原西鶴
小說家。大阪に住す。元祿六年（一六九三）歿す年五十二。

一五　鼠

井原西鶴

毎年煤拂は極月十三日に定めて、檀那寺の笹竹を祝物とて、月の數十二本もらひ、煤をはらひての跡を取り、葺屋根の押へ竹に使ひ、枝は箒に結はせて、塵も埃も捨てぬ隨分細かなる人ありける。過ぎし年は十三日に忙しく、大晦日に煤掃きて、年に一度の水風呂をたかれしに、五月の粽のから、盆の蓮の葉までも段々に溜め置き、湯の沸くに違ひはなしとて、細かな事に氣をつけて、世の費え穿鑿人に過ぎて利發顏する男なり。

同じ屋敷の裏に、隱居建てゝ母親の住まれしが、此の男生まれたる母なれば、其の吝き事限なし。塗下駄片足なるを、水風呂の下へ焚く時、つく〴〵昔を思ひ出し、「まことに此の木履は、我十八の時此の家に嫁入せしとき、雜長持に入れて、來て、それから雨にも雪にも履きて齒のちびたるばかり、五十三年になりぬ。我一代は一足にて埒を明けんと思ひしに、惜しや片足は野良犬めにくはへられ、ばしたになりて是非もなく、今日煙になすことよ。」と、四五度も繰言をいひて、其の後釜の中へ投げ捨てられ、今一つ何やら物思ひの風情して、泪をはら〳〵と溢し、「世に月日のたつは夢ぢや。明日はそのむかはりになるが、惜しい事をしました。」と、しばし歎のやみ難し。

むかはり　一周年。

折節近所の醫師水風呂に入られしが、「先づ以てめでたき年の暮なれば、御嘆をやめさせ給へ。」してそれは元日に何人

の御死去なされた」と尋ねられしに、「いかに愚痴なればとて、人の生死をこれ程に歎く事ではござらぬ。私の惜むは、去年の元日に、堺の妹が禮に參つて、年玉銀一包くれしを、何程か嬉しく惠方棚へ上げ置きしに、その夜盗まれました。そもや勝手知らぬ者の取る事ではござらぬ。其後色々の願を諸神に懸けますれども、その效もなし。又山伏に祈を賴みましたれば、『此の銀七日の中に出ますれば、壇の上なる御幣が搖ぎ、御燈が次第に消えますが、大願の成就せし驗』といひける。案の如く祈最中に御幣搖ぎ出で、燈火微かになりて消えける。これは神佛の事、末世ならず有難き御事と思ひ、お初穗百二十上げて七日待てども、此の銀は出ず。さる

十 懸山伏 詐欺をする山伏。

岩座 御幣を立つる臺。

人に語りければ、『それは盗人に追錢といふ物なり。今時仕懸山伏とてさま〴〵護摩の壇に操いたし、白紙人形に土佐踊さすなど、此の前松田といふ放下師がしたる事なれども、皆人賢過ぎて、結句近き事にはまりぬ。其の御幣の搖ぎ出るは、立て置きたる岩座に壺ありて、其の中に鰌を生け置きける。珠數さら〳〵と押揉んで、東方に西方にと、獨鈷錫杖にて佛壇を荒けなく打てば、鰌がこれに驚き上を下へと騷ぎ、幣串に當れば暫く動きて、知らぬ目からは恐し。又燈明は臺に砂時計をしくはし、油を拔取る事ぞ。』と、此の物語を聞くから、愈〻損の上の損を致した。我此の年まで錢一文遺さず暮せしに、今年の大晦日は、此の銀の見えぬ故胸算用違ひ

て心懸りの正月を致せば、萬の事面白からず。と世の外聞も構はず大聲上げて泣かれければ、家内の者ども興を覺し、我我疑はるゝ事の迷惑と、心々に諸神に祈誓を懸けゝる。

大方煤もはき仕舞ひて、屋根裏まであらためけるとき、棟木の間より杉原紙の一包を探し出し、よく〳〵見れば隱居の尋ねらるゝ年玉銀に紛れなし。「人の盜まぬ物は出ますぞ。」

さる程に悪い鼠め。といへば、お祖母中々合點せられず、「是程遠歩きする鼠を見たことなし、頭の黑い鼠の業、これからは油斷のならぬこと。」と、疊敲きてわめかれければ、醫師水風呂より上り、「かゝる事には古代にも例あり、人皇三十七代孝德天皇の御時、大化元年十二月晦日に、大和國岡本の都を

長崎水衛門 昔江戸湯島に居り獸に藝をしつくることを業とす。

難波長柄の豐崎に遷させ給へば、和州の鼠も連れて宿替しけるに、それ〴〵の世帶道具をば運ぶこそ可笑しけれ。穴をくろめし古綿、猫の見つけぬ守袋、鼬の道切るとがり杭、油火を消す板切れ、其の外嫁入の時の熨斗、田作の頭、熊野參の小米苞まで、二日路ある所をくはへて運びければ、まして隱居と母屋、わづかの處引くまじき事にあらず。と、年代記を引いて申せど、中々同心致されず。「口賢くは仰せらるれども、目前に見ぬ事は實にならぬ。」と申されければ、何ともせん方なく、やう〳〵案じ出し、長崎水衛門が仕入れたる鼠使の藤兵衛を雇ひに遣はし、只今あの鼠が人のいふ言を聞入れて樣々の藝盡し、錢一文投げて、『これで餅買うて來い。』といへば

錢を置いて餅くはへて戻る。何と〳〵我を折り給へ。といへば、「これを見れば、鼠も包金を引くまじきものにあらず。さては疑晴れました。さりながらかゝる盗心ある鼠を宿せられたる不祥に、眞丸一年此の銀を遊ばして置きたる利銀を、屹度母屋から濟まし給へ。」と言懸り、一割半の算用にして、十二月晦日の夜請取り、本の正月をするとて、この祖母獨寢をせられける。（胸算用）

横井也有
尾張の俳人。天明三年（一七八三）歿す年八十二。

一六　百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、優しきものゝ限なるべし。それも啼く音のあいなければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこのものには託しけめ。蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池にとんで翁の目覺したれば、このものゝこと更にも謗りがたし。

古今の序
花に鳴く鶯水に住む蛙　聲を聞けば生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。されば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず。」と、このものゝ上は翁の一句に盡きたりといふべし。

やがて死ぬ
やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲。芭蕉。

螢は類ふべきものもなく景物の最上なるべし。水に飛び

かひ草にすだく。五月の闇は、唯このものゝ爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕へられて油火の代りにせられたるは、このものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

筆蹟

鼓子花やどちらの露もまにあはず。也有。

横井也有筆蹟

茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて夕べは草に露おく頃ならん。つくゝぼふしといふ蟬はつくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり」と世の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。蜉蝣ははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の謗となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黃金蟲は賤し。

蟻は明暮に忙しく世の營に隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都を逃れてその身の安きことを得ん。さるも便あしき方に穴をあけて千丈の堤を崩すべからず。

蟷螂のやせたるも斧をもたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこのたぐひあるべし。

槐安の都

淳于棼醉夢入二大槐安國一。見レ王。王曰吾南柯郡屈レ卿爲レ守。凡二十載。使者代出レ穴。遂寤。尋二古槐下蟻穴一。乃槐安國。又一穴直上二南枝一。卽南柯郡也。異聞集。

蟷螂

欲下以二蟷螂之斧一禦中隧車之隧上。文選。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人に似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるをもて名によべり。松蟲、その木にもよらで、いかでかく名をつきたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも、同じ名ありて、松をからし、人にうとまる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕べ始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく殘りたるは、淋しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やりたく里の煙など、且は風雅の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話にはいかに團扇のひまなかりけん。（鶉衣）

竹林の七賢
嵇康。
阮籍。
山濤。
向秀。
劉伶。
阮咸。
王戎。

一七　明治時代の文學

佐々政一

佐々政一
國文學者。
文學博士。
東京高等師範學校教授。
大正六年卒す年四十六。

維新の偉業正に成りて、開國の國是一たび定まるや、世間は西洋の物質的文明の輸入に急にして、和漢の學術技藝を顧みるに遑なかりき。況や美術文藝のことの如きは、全く無用の長物とせられて、幾多の國寶は破棄せられ、無數の古典は廢紙となりぬ。此の間にあつて纔に文學の微光を存せしものは獨り新聞紙なりき。

新聞紙の刊行は、これ亦西洋に學びしものにして、當初は專

ら政治論の機關たり、實用功利の論に非ざれば、以て時代思潮に追隨するに足らずとなしたりき。　されど、普通教育の制度漸く國内に普くして、文學の知識が中流以下の社會に擴張せらるゝと共に、新聞紙の經營者も、亦此等の讀者に對して、その娯樂となるべき文藝の作物を供給せざるべからざるを知りぬ。　かくて、幕末以降、久しく失意の地にありし戲作者が、所謂續き物と稱する合卷風の小説を紙上に掲げ初めしは、蓋し明治文學の萌芽なり。

從來、筆を政治論にのみ執りたりし人々も、此の種の文藝の人心に影響することの著大なるを認めて、或は英佛の政治小説を飜譯し、或は新に架空の脚色を立てゝ、自家の主張を具體的に説明せんことを企てたり。　佳人之奇遇・雪中梅・經國美談等は當時最も喧傳せられしものにして、慷慨激越の調、時に青年者流を感奮興起せしむるものなきにあらざりかど、その豪放粗大の文は未だ人情の機微に入らず、眞に文學の眞諦を得たるものといふに足らざりき。

さもあれ、明治は既に十七八年を經たり、西洋の學術も技藝も稍咀嚼せられたり。　世の先覺者はかの徒に物質の皮相にのみ腐心するの愚なるを悟りぬ。　文藝美術の評價も日に漸く高からんとせり。　この勢に乘じて坪内逍遙等が文學論の出づるあり、硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり、在來の戲作者系の人々もこれに呼應して立てり。　こゝに謂

はゆる才筆家にもあらず、政談家にもあらず、熱誠なる態度を以て、直に人生を描破せんとする者は、將に踵を接して出でんとせるなり。

思ふに新文藝の勃興は、半ば西洋文藝によりて啓發せられたり。されども、他の一半は我が國の古文學に淵源せるものなることを忘るべからず。蓋し維新以來萌し來れる西洋文明謳歌主義は此に其の極に達して、その反動たる國粹保存論は盛に唱道せられ、國語教育の奬勵、古文學の研究が、隆昌を極めしは、あたかもこの頃なりき。されば、新文藝の先達は啻に西洋の文學のみならず、我が國の古文學に回顧し、或は中古の文學に私淑するあり、或は元祿文學に模倣するあり。我が文壇の泰斗として、新篇出づる毎に洛陽の紙價を貴からしめし尾崎紅葉と幸田露伴とは、ともに西鶴を學びてその新文體を創めしものなりき。

紅葉が艶麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が遒勁の調は巧に男兒の意氣を描きぬ。されど、その題材は稍單調なりき。良久しうして世間はその反復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小說・冒險小說・俠客小說等の複雜なる脚色に喝采し、或は慘憺たる事件を敍したる所謂觀念小說、悲痛なる苦悶を抒べたる所謂心理小說を歡迎し、或は神怪不可思議なる妖怪談或は淫靡不道德なる戀愛談と、幾度か流行は變遷しつゝ、その取材は日に〳〵人生の暗黑面に向

つて進み去らんとせり。その間、或は光明小說といひ、家庭小說と號する道德的傾向ある作物の行はれしものなきに非ずと雖も、皆膚淺陳套、未だ人心の要求をみたし、人生の理想を與ふるものにあらざりき。

この時に方りて、東洋の一小島國は日淸・日露の大役を經て、俄然として一等國の班に伍せり。戰勝に醉へる豪奢の餘弊と避け難き財政上の壓迫とは、國民が生活難の聲として青年の耳朶に響きぬ。顧みれば、嘗ては文藝の形式をのみ評論したりし批評家は、漸く人生の研究に轉進し來りて、或は高山樗牛が美的生活論となり、或は綱島梁川が見神說となり、或は自然主義といひ、無理想・無解決と呼び、在來の一切の敎權を放下すべしとさへ說く者あるに至りぬ。既に生活難の聲に慄ける青年は、徒に多岐に惑ひて、唯煩悶するあるのみ。而して、所謂自然派の小說は、益〻人生の暗黑面を誇張して、好みてかの悶々して焦燥し、狂奔し、疲憊困頓、蹌々踉踉たる敗殘の青年を描きつゝ、以て人生の實相を盡したりとなせり。煩悶せる者が、暫くこゝに同情者を得たるが如く感ぜしは、蓋し一時の迷想のみ。今や世間は漸く混沌たる思想界を出でて、更に高く、更に深き人生の眞意義を捉へんとして、倫理に、哲學に、宗敎に、文藝に、秩序ある討究を重ねんとせり。思ふに、我が小說界が、崇高偉大なる理想に逢着して、更に向上の一路を發見すべきは、甚だ久しからざらん

とするなり。

上來、主として小說の變遷を敍したり。最近の文壇に於て最も注目すべきはこの種の文藝なればなり。さもあれ、上古以來、常に流行し來りし抒情・敍景の小詩形も、亦甚だ衰へたるには非ず。

歌道には桂園の流を汲む者多く、俳道には蒼虬・梅室の門派のみ獨り盛にして、和歌・俳句といへば、專ら活社會と交渉なき閑人・隱者の間に行はれしもの、明治初年の大勢なりき。

かの國粹保存論、國文學の研究等の盛なる時に至りて、落合直文等とその門下生との手によりて、歌道はまづ青年社會に入り來りぬ。かくて偏に風雅を生命とせる花月の天地を小なりとして、活社會の人生を歌はんとする傾向を生ぜり。俳道には正岡子規出づるあり、天保の俗調を排して、清新なる天明調を復活せしめ、更に進みて淡々たる寫實の妙趣を鼓吹し、啻に俳句のみならず、寫生文と稱する小品文の流行をも促しぬ。この派より出でて、筆を小說に着けたるものに、夏目漱石等あり。

この他、明治の新文藝としては別に新體詩あり。當初は故外山博士等が新體詩抄の調なりしが、その詞藻の稍乾燥なるに慊らざる者は、或は中古語を以て西歐の詩趣を傳へんとするあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らんとするあり。中頃島崎藤村が溫雅優美の調、土井晚翠が縱橫跌宕

の風、最も青年の間に喜ばれたり。爾來、新詩の格調日に新なりと雖も、或は險怪、或は蕪雜、未だ雄渾偉大にして、眞に國民の詩歌と稱するに足るものあらざるに似たり。

更に、純文藝の範圍を出でて專ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、かの漢文直譯風の文章が流行したりし日に於ても、既に福澤雪池・福地櫻痴・成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては、坪内逍遙・森鷗外・三宅雪嶺・德富蘇峰・朝比奈碌堂・高山樗牛・大町桂月等あり。その文各特色あり、長短ありと雖も、皆縱横自在にして、言はんとする所盡さざるはなし。明治時代の所謂普通文は、純文藝の著作よりも、寧ろ此等の人々の筆致に負ふ所多きに似たり。

三宅雪嶺 名は雄二郎。文學博士。萬延元年（一八六〇）生。

大上有立德 左傳に出づ。穆叔の語。

一八　人生の快事その一　三宅雪嶺

「大上有立德。其次有立功。其次有立言。雖久不廢。」此之謂不朽。」と曰へるは、穆叔以前より行はれたりし格言なるべく、穆叔以後數千年を經て變ぜず。註に「立德は黃帝・堯舜、立功は禹・稷、立言は史佚・周任・臧文仲」とあり。他の例を擧ぐれば、孔子・釋迦・耶蘇の如きを立德とし、該撒・奈破崙の如きを立功とし、ホーマー以下の文學者を立言とすべし。この三不朽を智仁勇の達德に配當せば、立德は仁、立功は勇、而して立言は智なり。立功にも智を要し、立言にも勇を要すれど、主要なるものを擧ぐれば各〻特色あり。中に史的の意義あり

て現代に認むるを難んずるは、立德なり。現に立功家及び立言家の少からざるに、稱して立德家とすべきものを何處に見るか。立功及び立言は全く現實の事にして、過去にもあれば、現在にもあり、將來にもあるべく、立德の漠然たるが如くならず。今は立德の形跡あるものも、立功と立言との孰れかに屬すべきが如し。三不朽の中、立德は人の欲求する所の絕頂にして、聖たり佛たるは人生第一の快事なるかに考へらるれど、箒木の如く之を求めて遂に見失ふに終らん。現代の人の志す所は立功ならざれば立言なり。

魏の文帝曰く、「年壽有時而盡、榮樂止於其身。二者必至之常期、未若文章之無窮」と。是、文事に與る者の期せずして考へ

文帝 三國の魏の曹丕。武帝曹操の子。（八四七—八六）

及ぶ所にして、「筆は劍より強し」といふも、其の旨相近し。ホーマーは傳明かならざれど、傳說に依れば、琴を携へて人の門前に立ち、且謠ひ且語れる者なりきといふ。明を失ひしが上、門附の如く絃歌して錢を乞ひし者ならば、苦痛なる生活を送りしなるべきに、後世之を歎美して已まず、彼の如くんば死すとも可なりとするもの多し。凡そ苦心慘憺の甚だしきこと、詩人の句を撰するが如きは少し。司馬相如の子虛賦、左思の三都賦、辭を練るに全力を用ひき。杜少陵が「爲人性癖耽佳句、句不驚人死不休」といへる、眞に實狀なり。幾多詩人中には、強ち人を驚かさんとせず、或は之を喜ばしめんとし、或は之を悲しましめんとし、或は之を別乾坤に導

筆は 英國の詩人リットン卿の語。

司馬相如 漢の詩人。紀元五百年代の人。

左思 晉の文人。紀元九百年代の人。

杜少陵 唐の詩人。名は甫。（一六九—一四三）

かんとするもあるべけれど、要するに皆多少目的を達する所に愉快を感じ、洛陽の紙價を貴くせる時、誠に大勝利を得たる如く悅びたるならん。己の以て絶佳とする所、人全く解せず、外に出でて衆に笑はれ、内に入りて米鹽に窮する時、若し猶自ら信ずること篤くば、當世に屈して後世に伸ぶるあるを以て慰めたるべし。又實に當世に屈して後世に伸ぶるものあり。「人間知己少、破硯是良朋」といへるは、知己の少くして愈得意を感ぜるなり。

賈誼・蘇軾の策論は正しく立言なり。世に論文と稱するは皆然り。論文といふも全篇悉く議論より成るとは限らず、或は議論を敍事の間に挿むあり、或は議論を挿まずして自

人間知己少　村上佛山の句。

賈誼　漢の政論家。（紀元前二〇〇―紀元前一六八）

蘇軾　宋の政論家詩人。（一〇三六―一一〇一）

然に主張あるあり。マコーレーの英國史は歴史にして自由主義を鼓吹し、カーライルのフレデリック傳は傳記にして人格の堅實を奬勵せるなり。東洋の史傳は皆多少主張あり。爲に史實を枉ぐとの非難あれど、史實を枉げずして主張するを得ずとは謂ふべからず。

形を異にして實を同じくするは、詩と藝術、文と科學なり。立言は即ち立意にして、凡そ目的を達し得るものは、宜しく立言と見るべし。藝術家の製作に從事するは樂しきか、樂しからざるか。樂しくとも世間の想像する所とは同じからず。ミケランジェロの工場に入りし者は彼の努力に驚かざるなし。夜更けて眠りしかと思へば、突然起きて頭に

マコーレー　英國の歴史家。（1800―1859）

カーライル　英國の歴史家。（1795―1881）

ミケランジェロ　伊太利の文畫家・彫刻家。（1475―1564）

シスト 羅馬ヴァチカン宮にあり。天井畫は創造と題するもの。

ダーウィン 英國の生物學者。(1809–1882)

シェクスピヤ 英國の劇曲作家。(1564–1616)

アルキメデス 希臘の數學者、物理學者。(�little 282–212)

蠟燭を翳し、着手しある製作に從事す。シスト禮拜堂の天井畫を完成せしとき、絶えず仰ぎ居りしがために頸が曲らざりきといふ。上下に重んぜられて、生活も豊かなりしが、肉體の滿足を事とせず。繪畫及び彫刻に汲々たりしは、苦心慘憺の間に漸く理想に近づく愉快の禁じ得ざるものありしに因りてなり。科學家は天地の美を讃歎せず。世間に美として讃歎する所も、嚴密に分解し、眼中美もなく醜もなし。ダーウィンは自ら歎じて曰ふ「吾はシェクスピヤを讀みて少しも興味を感ぜず」と。初より感ぜざりしにあらず、生物の研究を專らにし、遂に之を感ぜざるに至りしなり。アルキメデスは兵卒に襲はれし時、正に沙上に幾何學の圖を描きて、一意研究してありき。兵卒を顧みて曰ふ「暫く待て。問題を決せん」と。言ひ終らずして殺さる。傳說にてはあれど、科學家の研究に專らなること往々此の如きものあり。眞に研究を念とするものは、必ず別に樂しむ所あり、常人の樂しむ所と異なり。稱して樂しむといふべからずんば、他の何物にも代ふべからざる方針を取りて進みつゝありと謂ふべし。

英雄何必讀書史 清の鄭板橋の句。

一九 人生の快事その二

三宅雪嶺

「英雄何必讀書史」とは單に東洋のみならず、何處にも言ひふるしたることとなり。泰平無事の日には斯く考ふる者多か

らざれど、警報傳はりて多少世間の動搖する時には、風雲に際會すといふを事實にせんと欲し、曰く、「大丈夫當に屍を馬革に裹むべし」。曰く「男兒當に天下に横行して富貴を取るべし」と。出でては將、入りては相、若し之を併せ得ること困難ならば、せめて其の一を得るの愉快なるべきを思ひ、軍人たらんか、政治家たらんか、遠きは歴山、近きは奈破崙、人生れて彼の如くなるを得ば、萬死して憾なしとす。其の何が望ましきかと問へば、言ふまでもなく天下を掌にし、事として意の如くならざるなきに在れど、彼等果して世人の想像するが如く愉快を感じたりしか。歴山は天眞爛漫、直情徑行、一切の僞善を憎み、波斯に遠征して波斯の歡樂に耽りしに似たれど、彼は苟も無道といふを敢へてせず。當時の社會情態より考ふれば、身を律するの嚴なりしを認めざる能はず。彼の愉快を感ずるは富貴にあらず、無上の權を振ふにあり。歳三十にて歿し、能く彼の如きを致したるは偶然にあらず。奈破崙の幸福なるは十七歳までなりといふものあるは、即ち爾後野心に驅られて東奔西走し、一日も心の安寧を得ざりしを指すなり。されど奈破崙の愉快を感ぜるは、安樂の生活より寧ろ南征北伐の間に存せずや。肉體に苦痛あれど、己の力を伸し得る處に滿足を感じたるならん。彼は一種の理想に生き、之に近づくを以て滿足せしもの、その羅馬を模範とし、世界の地圖を改め、永遠の平和を計れる、實に時

代を超越せる觀あり。衣囊にホーマーを置き、劍を以て世界を切從へんとの抱負を遂行せんとし、胸中の悶々たる時には、涌くが如き智略とアルプスを拔く勇氣とに快感を覺えたるべく、遠洋の孤島に流さるゝや、居常鬱々たりとはいへ、自ら古の英雄に比較して滿足を感ぜるものゝ如し。彼は不可能を追求して智囊を絞りし爲に何れの邊まで人智を働かし得るかを示し、英雄の出づる獨り古代に限らず、後世猶古英雄を凌ぐものあるを證明せり。

青年の功名に急なるものは、政治家たらんことを希望するもの多し。何れの國にも法政の學を修むるものゝ多きは官吏となり、銀行會社員となる外、比較的功名心を滿たすべき門戸の開かれ居るが故なり。山高ければ麓廣し。高き位置にあるが故に麓に集る者甚だ多し。されど高き位置に上れる政治家に何の快樂あるかといへば、世俗の所謂快樂を得ることは少し。後世に欽慕せらるゝ者は特に然り。奈破崙に對抗して英國の權威を維持せしウィリヤム、ピットは獨身にして、國家を以て妻とすと稱し、收入を擧げて政治の事に投じ、爲に負債山の如くなりき。伊國の建設に當り、獨り國政の整理に任ぜしカヴールは、同じく國家を以て妻とすと稱せり。大いに富み大いに驕らずんば、高き位置を占むる効なしといふ者あれど、かゝる事に歡樂を求むる徒は政界に飛ぶとも僅に蝙蝠の飛ぶが如し。大政治家の

ピット 英國の政治家。(1759-1806)

カヴール 伊國の政治家。(1810-1861)

アウレリウス
羅馬の皇帝。(121-180)

バリッシ
佛國の陶工。(1510頃-1589)

愉快は、我が施設の効顯れ、幾分にても國家社會の進善せんとするを見るにあり。古代には諸葛孔明の如き、マルクス、アウレリウスの如き傑出せるものありき。

器械の應用は近世に入りて加速度の進歩を遂げ、商業・工業・農業は之が爲に重きを加へ、嘗て立功家として軍人及び政治家を推したるもの、今は之に商業家・工業家・農業家等を加へざるべからざるに至れり。貧困は發明に必要ならず、富みて新工夫を運らすあり、貧困を忍びて成し遂げたる事業の價値の少きもあれど、新發明・新工夫の記錄は、半面より觀て貧困との鬪爭なり。パリッシの如きは一の極端なる例とすべし。實際に於て、勇者は世に益すること多きにもせよ、後人を感奮し、努力せしむるは、一切を放擲して事に專らなるものゝ傳記にして、事業としての直接利益の外、間接に人心に益する所多し。「彼も人、我も人、我豈彼の如くなるを得ざらんや」と後人の發憤するは富貴にして歡樂に耽る所にあらず、己の爲すべきを信じ、斃れて後已まんとする所に在り。爲に人は往々立德の事に考へ及ぶ。

帝王は一世の尊、而も孔子の廟に跪き、釋迦の寺に跪き、耶蘇の會堂に跪けり。個人の勢力にして最も廣く最も久しく影響の及ぶべきものを擧ぐれば、かく帝王を跪かしむる立德家なりとすべく、隨つて志の大なる者の、以て人生の最大快事とするは之に彷彿たるに在り。されど、彼等がたとひ

能く立德家の如くなるを得たりとて、果して愉快なるを得べきか。功名心の熾なるものは、後世に於ける勢力の孔子・釋迦・耶蘇の如くなるを欲しつゝ、現在に於て孔子・釋迦・耶蘇の如き不遇又は不快なる生活を送るを欲せざるべし。もと立德は人生の美點を綜合して考へたるもの、人生の完成を以て衆德を具ふるにありとし、暫く史的人物を藉りて之に充つるのみ。人生最上の目的は立德なりと雖も、立德家たらんには如何にせば可なるかといへば、容易に解答を與へ難し。分け登る麓の路は多けれど、同じ高嶺の月を見る。立德は高嶺の月なり。而して麓の路の最も主要なるものは、實に立言及び立功にあり。立言に種類あり、詩あり、文あり、藝術あり、科學あり。立功に種類あり、軍事あり、政治あり、商業あり、工業あり、農業あり。之を細分すれば頗る多數に上るべけれど、其の孰れかを念とし、十分にその能力を伸さば、幾許か立德たること必ずしも期し難きにあらざるなり。

（日本及日本人）

二〇　大丈夫の覺悟

幸田露伴

幸田露伴　文學者。文學博士。名は成行。慶應三年（一八六七）生。

大丈夫、苟も身を學藝に委ねんとせば、まづ受發の二途に於て大丈夫の覺悟あるを要す。發とは外に內の發するなり。受とは內の外に受くるなり。受くることは須く大海の百川を呑むが如くなるべし、發することは宜しく甘雨の八方

に澆ぐが如くなるべし。受くることの多からざらんことを嫌ひて、川の大、川の小を嫌はず、發することの豐ならざらんことを恐れて、方の東、方の西を問はず。これを受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす。受くるに嫌ふところあり、發するに躊ふところあるは、兒女の情のみ、大丈夫の覺悟にあらず。

受は發の本なり、發は受の末なり。途は二にして實は一。受をよくすれば發は其の中に在り。大賢は能く受く、中才は勉めて克く受く、賤人は好んで受くるあり、敢へて受けざるあり。誓つて必ず賤人たらざらんを期する、之を眞に身を學藝に委ぬといふ。受の途に於て工夫刻苦するものは學藝を成すに庶幾からん。受の途に於て大丈夫の覺悟なきものは、爲すにだに堪へざらんとす。何ぞ成ることあらん。

評の性は多く褒貶毀譽を具し、人の情は常に譽を愛し、褒を愛して、毀を惡み、貶を惡む。是に於て、毀譽褒貶の我が頭上に加へらるゝや、大丈夫の覺悟なき者、或は徒に懼れ、或は徒に驕り、或は人を恨み、或は自ら足れりとして、惜むべし、堂々たる六尺の身、他人に籤弄せられたるを悟らず。人を飈風にし、我を粃糠にす。實に自ら待つの薄きのみならず、抑また學藝に負くこと多しといふべし。大丈夫豈此の如くなるべけんや。それ大海の百川を呑む、大も亦呑む、小も亦呑

擊壤の歌

日出兮而耕、日入兮而息。鑿レ井而飲、耕レ田而食、帝力奚有二於我一。

舜の詩

南風之薰兮、可三以解二吾民之慍一兮、南風之時兮、可三以阜二吾民之財一兮。

む、清も亦辭せず、濁も亦辭せず。日に默々たり、洋々たり、而して、漸く我が大を成し、徐に我が大を用ひ、日に活潑々たり、圓陀々たる大作用をなす。大賢の、人の言を受くる、亦是の如し。精雜密疎の說、毀譽褒貶の評、皆一齊に之をして日に進ましむるあらんことを願はざる無し。古人まことに此の如し。則ち堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへど、批評も亦堯舜の聖を如何ともするなし。擊壤の歌は誰か堯の德を傷つくるものとなさん。舜の詩猶存すれども、誹謗の木の文は今何處にかある。

此の故に、學藝に志ある者は能く外に受くる大賢の如くなる能はずとも、勉めて己に克つて人に受くべし。饒舌の分疏は老婆の醜態、逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ。縱令、滿面の垢辱、堪へんとして堪ふる能はず、筋張り、血涌き、劍を拔いて直に報いんと欲するに至るとも、亦先づ牙關を咬定して隱忍し、頭を垂れ、心を虛しくする工夫の裏より一天地を拓き得て、笑つて、立つて、謝して、牛溲・馬勃を我が藥籠中に收むるが如くならんを期すべし。之を大丈夫の受の覺悟といふ。

人貶すれば便ち受けずして胡言亂說し、人讚すれば便ち默受して欣々たる如きは、閨閤の兒女に在つては咎むべくもなし、學藝の士に在つては甚だ鄙しむべしとす。古に曰く、「峻谷に入るものは當に葛藟を攀ぢて以て顚墜を免るべし、

時俗に處るものは當に道義に據りて、しかして後もつて自立するを得ん」と。學藝に遊ぶものは當に反求の功に賴るべし、漸く深造するあらん。たゞ反求の功に賴る、則ち揚げらるゝも自滿せず、抑へらるれば、愈〻奮ふに足らん。

徐子曰く、「今夫、身を立つる、人の譽むる所とならずして、人の謗る所となるものは、未だ善をなす理を盡さゞればなり。善をなす理を盡すものは將に舜の若くならんとす。舜と同じからずと雖も、それ敢へて之を謗るものあらんや。故に語に稱す、『寒を救ふは裘を重ぬるに若くはなし、謗を止むるは身を修むるに如くはなし。』と」。善いかな言や、能く大丈夫の覺悟を說けりといふべし。古人五十にして四十九を非とす。今、我、昨の我を是として後の我に望むなくんば、我の死するや久しからん。

徐子　徐幹字は偉長、後漢の末、魏の初の人、中論を著す。

五十にして　蘧伯玉年至二五十一而知二四十九年之非一。淮南子。

大丈夫まさに受發の二途に於て、大丈夫の覺悟を以て立ち、而して學藝に盡すあるべし。子思曰く、「能く其の心に勝つ、人に勝つに於て何かあらん。能く其の心に勝たず、人に勝つを如何せん」と。爲す所ありて美とせられず、內に求めずして人に責むる、其の情は憫むべし、其の爲は悲しむべし。我豈、人の勝つを好むを陋とするのみならんや、我また、實に之を愧づ。倣はんかな海や、百川それ海を如何せん。（讃言）

師範學校 國文教科書 本科用 卷六 終

師範學校 國文教科書 本科用 卷六附錄

第六篇 國語問題

國語を整理し又は改善すべしといふ要求は何れの文明國にもあらざるはなし。唯それをいかに整理し改善すべきかは、議論の存する所にして又最も研究を要する事なり。殊に我が國にては國語に關する大小の問題山の如く多く、明治初年以來絶えず論議せられて、中には實施の途に就けるものもあれど、今後に解決を要する問題亦頗る多しとす。

一 發音に關する問題

發音

聲音は言語の要素なり。さて國語の發音を如何に規定すべき。

1 拗音クヮはカと區別して發音すべきか。

クヮンシャ(官舍)　カンシャ(感謝)　クヮシャ(菓子屋)　カシャ(貸屋)

2 ジとヂ、ズとヅの發音は嚴に區別すべきか。

キジ(雉子)　キヂ(生地)　クズ(葛)　クヅ(屑)

3 が行音とが行鼻音とは區別すべきか。

ギリ(義理)　ハギ(萩・脛)　グンカン(軍艦)　カイグン(海軍)

4 エイ韻を正しく發音してエー韻と區別すべきか。

メイセイ(名聲)　セイテ(急而)　メーセー　セーテ

文字

斯の如きは何れも決定を要する問題なり。この他、訛音矯正の標準及び方法の如きも研究を要する問題なり。

二　文字に關する問題

我が國の文字は將來如何にすべきか。

甲、今日の如く漢字を主、假名を副としたる假名交り文を可とするか。

乙、假名を單用すべきか。

丙、羅馬字を國字とすべきか。

ことはこれ非常の大問題にして論議紛々未だ容易に決定を見ざる所なり。蓋しこの問題たる、單に學理のみを以て論決すべからず、又必ずしも歷史・環境にのみ拘泥すべからず、

學習の難易、使用の便否、その他各方面を考量して萬に一失なきを期せざるべからず。その未だ結論に達せざるも亦已むを得ざるなり。

姑く現在の國字に就いて考ふるもなほ幾多の問題あるを見る。

1 平假名・片假名の優劣如何。

學習の難易については國語調査委員會に於けゐ心理學的研究あり。されどなほ他方面より研究する餘地あるものゝ如し。

2 平假名片假名の字體はなほ整理の餘地なきか。

3 常用漢字の字數を制限すること如何。

4 漢字の形體を如何に一定すべきか。

漢字には正字・譌字・俗字などその形體甚だ多く、而も時代により字書により變遷出入一ならず。愆に之を正さんとすれば、益〻紛糾を來すに至る。我が國の常用文字としての漢字は成るべく便利と正確とを主として早くその形體を一定する必要あるべし。

5 漢字の筆記書體を一定する必要なきか。

楷書だに前の如し。行草體の如きに至りてはその多種多樣なること、一字にして十餘形あるものあり。書家の文字はともあれ、日用文字の筆記體としては整理を要することならん。

6 假名遣は歷史的に從ふか、表音的にするか。なほその標準は如何。

今日、普通教育上には歷史的假名遣によることゝなれりと雖も、この問題は未だ根本的の解決を經たるものにあらず。殊に字音假名遣の如きは之を歷史的に正しく書きあらはすことは、容易ならざる勞苦を要してその實益甚だ大ならざるが如し。またたとひ表音的假名遣としても個々の事實に就きて更に細密なる研究規定を要するものあり。

文法

國語の假名遣も亦然り。學習困難の程度こそ異なれ、教育上整理の必要はたしかに存するものと謂ふべし。

7 送假名法・句讀法・分別書方等を一定すること。

これまた一般に行はるゝやう成るべく便利なる標準を定めんことを要す。分別書方は假名又は羅馬字の文に於て殊に必要なり。

8 外國の地名・人名等の書方讀方を一定すること。

ウォシントンかワシントンか、ヴェニス・ヴェネチア・ヴェネチヤ・ベニス・ベネチア・ベネチヤ何れかの類、これも一定するを便とす。

9 羅馬字の綴方を一定すること。

羅馬字を國字とするの可否は姑く措き、なほ停車場の標示に、郵便切手や紙幣の文字に、羅馬字を用ふる機會は少からず。今日綴方についても種々の說あり、統一する所なきは不便なり。

三 文法に關する問題

單語

國語の文法に關する問題は學說上未だ定論を得ざるもの少からず。少くとも教育上には

1 文法上の用語及びその意義を一定すること。

2 文語の文法につきて一定の規範を作ること。

3 文語の文法に於て許容すべきことを整理すること。

などは事に當り必要なり。而してこの三項は口語法に於ても同樣に必要なり。殊に口語法に於て標準となるべき語例を示さんことを要す。

四 單語に關する問題

單語に關して尤も必要なるは標準的の國語辭典を編纂することなり。從つて

1 新語を作ることの方針、特に漢語と國語との釣合。

文章

2 譯語及び學術語の一定。
3 外國語をそのまゝ取入るゝ標準及びその發音。
4 固有の國語にして復活せしむべきものゝ取扱。
5 東京言葉にして廢棄又は修正すべきもの。
6 地方の言葉にして採用すべきもの。
7 曖昧なる語、卑俗なる語の修正又は排斥。

等は一定の方針を定めて一々規定するを要すべし。

五 文章に關する問題

國文に關する問題も亦少からず。

1 將來の普通文を如何にすべきか。
2 口語文に於ける敍述體對話體の形式如何。
3 候文の存廢如何。なほ差當りて候文の形式に改善すべき點なきか。
4 漢文訓讀の法如何。
5 從來の國文學史上の代表的文學及び國文乃至國民性に影響せる支那印度乃至西洋の重だちたる有名の文學を口語文に譯する必要あり、その實行法如何。
6 口語詩の奬勵法如何、

數へ來れば、國語問題は僕を更ふとも盡くることなきが如し。これらの問題には根本的の大問題として容易に決し難きものあり、枝葉の事項なれど、實際上解決を急ぐものあり、根本已に決すれば他は自然に解決し又は消滅するものあり。要するに實際の解決法としては成るべく急激の變化より生ずる社會の動搖を避けつゝ漸次に不便を去り整理を圖らざるべからず。而も口を穩便に藉りて故らに低

回踟躕し、問題の解決を遷延するが如きは決して容すべからざるなり。

蓋し言語は活物なり。生々蕃息して一日も休むことなし。これを律するに一定の準繩を以てし、嚴正なる規範に入れんとするは、理に於て當らずとす。規範は一時的のものにして永久不變のものにあらず。然れども規範なければ、言語の統一得て期すべからず。これ一面には規範を定めて言語を律し、一面には言語變遷の事實を認めて規範に聰明なる修正を加ふることの、常に止むべからざる所以なり。

師範學校 **國文教科書** 本科用 卷六附錄 終

文部省檢定濟
大正八年一月十日 師範學校國語科教科書

明治三十六年十二月五日印刷
明治三十六年十二月八日發行
明治三十七年二月廿九日訂正再版發行
明治四十年三月三日訂正十二版發行
明治四十年十一月七日修正十六版印刷
明治四十五年二月九日訂正十四版發行
大正八年一月二日修正十八版印刷
大正八年一月五日修正十八版發行
大正四年十月廿七日修正十五版印刷
大正四年十月三十日修正十五版發行
大正五年一月七日修正十六版印刷
大正七年十月廿七日修正十七版印刷
大正七年十月三十日修正十七版發行

定價金三拾五錢
大正八年度臨時定價金四拾九錢

著作權所有

編者 東京市小石川區高田老松町五十二番地 吉田彌平
發行者 東京市神田區裏神保町六番地 上原才一郎
發行所 東京市神田區裏神保町六番地 光風館書店 (電話神田三千八十七番)(振替口座東京三二七番)
印刷者 東京市神田區裏神保町六番地 四海民藏

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

東京秀英舍第一工場印刷